

第3回 蘇東坡は青春の迷いを語った

—— じんせい もと 人生は本より事はなし

2016年7月17日（日）。

まだ梅雨明け宣言はなされていなかったが、早朝から蝉の声が聞かれ、とりわけクマゼミ特有の大きな声が響き渡っていた。このあたりでクマゼミが聞かれるようになって10年を超えただろうか。次第にその勢いが増しているようだ。地球の気候が変化し、夏の暑さが年々厳しくなって、そのうち35度ならまだ涼しいやみたいになったりするのだろうか。

イノ君のくる時間は変わらずいつもの午後3時だ。私がコーヒーを用意する

と、イノ君はちやぶ台にICレコーダーと1冊の本を置いた。本はジョン・クレアの詩集（森松健介編訳『新選ジョン・クレア詩集』（音羽書房鶴見書店、2014））で、イノ君に頼まれてネットで注文したものだ。3日も経たずに届き、早い方がいいだろうと、勤務が重なる日に施設で渡した。そのときに、「この前のはウエブに出せる準備がほぼできているけど、1回限りになってもさびしいから、次の録音もあればいいかなあなんて思ってるんですけど」と言うと、「あつ、そうなんだ。じゃあ、そのうち〇〇に行ってみつかも」。イノ君は途中で、話はそれだけで終わった。

それから10日余りが過ぎて、もしかすると、「我が生涯」は1回で立ち消えといこともあるかと思ったりした。トバー君なる人物がいかなる存在であるか不明であるが、1回分の話くらいはでっちあげられても、続けるとなるとさすが

に難しいだろう。法螺話は深入りせずさらっと終わるくらいがよい加減であろう。

ICレコーダーには2回目が収録されているのか聞いていいものかちよっと躊躇していると、イノ君はそれをおおい隠すかのようにして詩集を私の方に向け、「えーと、この本ありがと。ボクが頼んだんだけど、なんかページを開けるのに緊張しちゃって。なんだかんだ10年ぶりで、いろいろあつたしね」

ぼそぼそ声で言った。

「そう。それで読んでみました？」

「持ってきてくれた日はビニール袋から出すこともしないで、翌日はサーフィンをして、シャワーを浴びたら、これなら大丈夫かなって感じがしたんで、本を開けてみたんだ」

「で、どうでした？」

「そんでさあ、突然だけど、おじさんって、初恋の人っていた？」

「えっ、いきなり、ホントに突然ですね。あつ、そうか、ジョン・クレアにはなにかかっていう女性への愛を歌った詩がありましたよね」

「マリアに13歳で恋したんだ。マリアはそのとき9歳でね。おじさんの初恋もそのころだったりした？」

「あれが初恋っていうようなものだったのかわかりませんが、小学校の高学年のころに気になる子がいたりはしましたよ。中学生のころに、遠くに引っ越してしまいましたけど」

「へーえ。そうなんだ。それで、それつきりだった？ 後でその人と再会したりした？」

「大学生のときに、なぜか偶然、電車の中で出会って、すっごくびっくりしたってことがあります。こっちに帰ってきているって、噂には聞いていましたけど、まさか同じ電車に乗り合わせるとは、びっくり栗まんじゅうってやつですよ」

「そんなさあ、どうだった？ やっぱりその人が好きなんだあって思ったりした？ それとも、全然違っていた？」

「ジョン・クレアのマリアの詩みたい、一生涯愛を保ち続けるようなことを私に期待しても、それはないですよ。中学生から大学生の間の数年間って、かなり変わりますよね。だから、うんと距離が離れてしまったなあって、それがちよつとシヨックでしたよ。また好きになる気持ちがちよつと動きかけたんだけど、でもそれは絶対にうまくいかないってわかったんで、なんか切ないような感じがしたって、そんなところだったのでしようね。古いことなので記憶もあいまいです

けど」

「ふーん、そんなことがあったんだ。ボクはね、この本を読んで、初恋の人に再会して、今度こそ本当に好きになってしまったって感じかな。こんなボクだから、現実の初恋なんかはないから、ただの比喩だけだよ。昔も好きだったんだろうけど、なんで好きだったのかいまと違ってはわからないって感じがするんだ。なんにもわかっていなかったくせして、ただ好きとか思って、ボクって馬鹿じゃないって、そんなところだよ」

「大学で卒論まで書いて、なんにもわかっていなかったって、どういうことですか？」

「この詩集を読み出したら、とにかく驚くことばっかだよ」

「イノ君って、驚くのがなんか好きですよね」

「ほら、この本のタイトルに『新選』ってあるけど、日本で初めて訳された詩はつか収められているんだよ。原詩は難しくて、全部読んだわけじゃなかったから、初めて読んで驚くのはまあいいんだけど、それにしても、まるつきりわかっていたなかつたってことなんだよなあ」

イノ君はそこから雄弁になり、十数分間にわたって1人で話し続けた。要約すれば、(1) 学生時代に読んだのは当時出版されたばかりだった訳書(鈴木蓮一訳『ジョン・クレア詩集』(英宝社、2004年))を頼りに原詩の一部だったこと、(2) ジョン・クレアの詩は好きだったはずだけれど、愕然とするばかりに理解が浅かったこと、(3) 大学卒業後はジョン・クレアの詩を学んだことを消し去ろうとしたこと。その3点を言葉を少しづつ変えながら繰り返した。イノ君はツボにはまるとときどきそのようなことになる。そうになったら、下手に口をはさまずに、

自分でエンドレステープから這い出してくるのを待つのがいい。

空になったコーヒーマグをくるくるまわしながら適当に聞き流していると、

イノ君は急にはっと顔を上げ、本をぱっと開いて、

「ほら、見て、これなんかもうホント驚いちやっただから。おじさん、これ読んだ？」

「いえ、読んでないです。だって、ビニールの袋に入ったままだったでしょ」

「じゃあ、いま読んでみて」

押しつけてきた本を手にとると、開かれたページには「傷痕軍人、あるいはイギリス人の忠誠心」という題の詩があった。戦場で肉体を大きく損なわれてから、物乞いをして生きてきた老いた傷痕軍人の声を代弁する詩だった。

老人はこう叫んだ。

「そして万一我が国が、その自由を護るために再び、

兵士を必要とする事態になったならば、

私は、喜んでどこかそれ以上に、真っ先にはやく跳びはねてゆく、

陸軍に加わってもいい、海軍でたち向かってもいい。

「その戦場で、我が国を侮辱する敵への目印として

私は軍旗を立てます、最前線の隊列に。敵の奴らに、

この一度限りはつきりと、どんな《手足の切れ痕》の勇気が

アルビオンの島から参戦するかを思い知らせるために。

(森松健介編訳、190ページ)

《手足の切れ痕》には「自分を指す」との訳注が付けられていた。

初恋を聞かれたので少年時代を思い出しやすくなっていたのだろう。私はすぐに、50年ほど前に、まさに物乞いをする傷痕軍人を見たのを思い起こした。

「若いころは、太平洋戦争などというものは遙か遠い昔の歴史上の出来事だと思っていました。歳月は年々遠ざかって行くのに、40代、50代、60代となっていくつれて、戦争の時代との距離が逆に縮んでくるかのように感じています。私は戦争が終わって10年後に生まれたので、実のところ戦争はそう遠いものではなかったのでしょうか。今度、東京オリンピックがあるってことになってますけど、この前の東京オリンピックはイノ君が生まれる20年も前なんですよね。私は9歳だったけどかなりはつきりと思い出せます。イノ君にとっての東京オリンピック

クよりも私にとっての戦争の方がずっと近いのですよ。だから、私にとって戦争はまだすぐそこにあっただんなあって、このごろは思います。

あれはたぶん東京オリンピックよりほんの少しだけ前だったのでしよう。平塚の七夕に連れて行かれ、駅を出てすぐのところ、びくんと足がすくんでしまいました。1人の男が、片手しかなく、片足しかない肉体をあらわにして道にはいつくばっていました。その横で、もう1人の男がアコーデオンを弾きながら何かを語っていました。2人とも真白な服でした。その日、七夕で何を見たのか全く思い出せません。でも、目を射るような真白な服から飛び出た、肘から先のない腕と、腿から先のない足はいまも鮮明に浮かびます。その2人はこの詩にあるような傷痕軍人だったのです。戦争から十数年でしたから、老人ではなくて壮年でしたけれど」

「おじさんときには日本はまだそういう時代だったんだね。日本はそれからいまでもずっと戦後のまんまだから、傷痍軍人が新たに生み出されるっていうことはなかったけど、アメリカなんかだとそうではないんだよなあ。イランとかアフガニスタンとかの戦場に行かされた兵士が、爆風の衝撃で脳が損なわれて、人格が変わってしまったなんてことがあるって、どっかで読んだけど、それも見えにくいけど傷痍軍人なんだよね」

「ジョン・クレアのこの詩はぜんぜん過去のものになってはいないってことなのかも知れませんか」

「日本だってこの先どうなるかわかんないもんなあ。この間の参院選挙の結果を見ると、なんか心配だよ。『世界の現状を直視すれば、平和を守るには力が必要だ』って言われてき、はいそうですねって、納得するのって、なんかヘンだと思っ

だ。まやかしのような気がしてしょうがない。ジョン・クレアの詩は150年以上も昔だよ。この前、トバー君から聞いた郭綸かくりんという元軍人の話は900年以上も昔だよ。二つはきつとぜんぜん違っただけど、でもなんか共通するところがあるような気もするんだ。そして現代ともまるで無関係ではないようにも思ったりするんだ」

「そうなの？」

「おじさんは、そうは思わない？ だって、2人とも命をかけて国のために戦ったんだよね。志願して戦場に行ったのか、無理やり連れて行かれたのかはわからないけどさ。とにかく戦場で懸命に戦ったんだよ。国のためにそれだけのことをしたんだけど、それにちゃんと見合うような後半生を送れていないんだよ。とくにジョン・クレアの傷痕軍人は肉体を損なわれて、ひどいよね。そうした苦々し

現状を突き破るために、いい、ここが大事なんだけども、再び戦場に立って華々しい活躍をして見返してやりたいって夢想するのって、とつても悲しい同じ構図のように思えるんだけど、おじさんはどう思う？」

イノ君はかなり熱くなってきた。

「確かに似たところがあったりするけど、郭繪は一応は役人になっていたのだからずつとまじな境遇だと思えますよ」

「そんな相違点はどうでもいいんだよ。ボクが言いたいのは、戦場に身をまた置きたいって思うようになるのって、ものすごくヘンだっていうことだよ。だって、2人とも戦争で人生を変えられてしまったんだよ。それなのにさ、絶対におかしいよ」

「なるほどねえ」

「ジョン・クレアの傷痍軍人と郭綸とではユーラシア大陸の東と西、時代背景も個人的な境遇もまるで違うんだけど、戦争のいかがわしさというか、戦場に人を送り込むメカニズムには共通性みたいなものがあるのではないかって。そこんところが重要だと思うんだ」

「そうなのかな」

私はわざと冷めたような返事を続けた。

「改憲っていうのがなんか現実的になってきたんで、あの党の憲法草案っていうのを読んでみたんだよ。むかつくところだらけでさ、かなりヤバイぞって感じがした。戦争をする国にするなんてことは、そりゃあね、あからさまには書いてないから、鈍感な人は、別にふつうじゃんって思っちゃうのかも知れないけど、そこがさ、巧妙にいかがわしいことをしようとしているなって、そんな感じがする

んだ」

「そういうことなのかな」

「おじさんは自分はトシだからもういいやとかって思ってたんじゃないの。平和な時代に生まれて、このまま逃げ切れるかもって。そんなのずるいよなあ」

「いや、そういうことではないですけど」

「なんとなくだけど、これからはさ、みんなでいそいそと、自分たちが最も大切にしないではいけないものを壊してまわるようなことになるんじゃないのかなあ
って、思ったりなんかもあるんだ」

「どういうことですか？」

「言っているボクにもわかんないけど。とにかく、だんだんとヘンなことになって、それに無感覚になっていくような気がするんだ。ほら、体でも心でも少しず

つ具合が悪くなってくるのって、本人がいちばん気がつきにくかったりするんだよね。ボクも経験があるけどさ」

イノ君は顔をゆがめた。イノ君は感受性が鋭いせいか、これまでに幾度か心身の不調を経験している。サーフィンを始めてからはやや安定しているようだ。

「重いリュックをずっと背負っていると、重さに無感覚になるってこともありませんよね」

「だからね、ボクらの時代のことは、大昔の人間であるトバー君みたいな人の方が、案外とはつきりと見えているってことがあるのかもって、ジョン・クレアの詩集を改めて読んでから思ったりなんかしたんだ。あのね、ジョン・クレアの詩はとっても好きだったんだけど、昔むかしの詩なんか読んで、なんの意味があるのかって聞かれて、うまく答えられなくて、なんにも意味がないって聞き直っ

た方がいいのかなあと思ってみたりもして、頭の中がごちゃごちゃになっちゃって、ジョン・クレアの詩を読んだこと自体を後悔したりもしたんだ。つまり、ボクはなんにもわかかっていなかったんだよね。いまだってそうなんだけどさ」

「つまり、過去に目を向けることにもなんらかの意義があると、思い直したってことですか？」

「というより、過去に視点を置いて現代を見たらかえってよく見えたりするのかもしれないけど」

「でも、とりあえずイノ君のお友だちのトーパー君ですよそとうばね。蘇東坡そとうばといったらなにせ900年以上も昔の人ですよ。現代では評判のあまりよろしくない儒教が骨の髄まで染み込んでいる人です。憲法草案どころでないもつと古臭いやばいことを言い出したりすることだってあるかも知れませんかよ」

「900年前のままだったならそういうことにもなるだろうけど、トバー君は違うような気もするんだ」

「それで、トバー君にまた会ってみたんですか？」

「実はね、〇〇に行くのはちよつと控えていたんだ。『我が生涯』を語ってつて頼んだのはこっちなんだけど、いざ始まると、ちよつと面倒っちいかなあつて思っちゃつて。ボクつてそういうところがあつたりするんだよね。テキトーつていうのができないでしょう。だから、始めたからには完璧にみたいになつて、重くなつちやうんだよね。それに、トバー君も最後は重い雰囲気だったし」

「音だけから察しられましたけど」

「あんなふうになつちやうと、何回も話を聞くのは、ちよつと重苦しいよね。もしも、トバー君の一生を全部聞くようなことになつたら、何十回にもなりそう

だしなあ。だから、やめておいたほうがいいかなって感じに傾きかけていたんだ。

でも、ジョン・クレアの詩を読んで、トーバー君に会ってみたい気にもなってきたんで、それでね、また『一点突破、全面展開』で行こうって考えたんだよ」

「へーえ、今度はなんの詩を大声で唱えましたか？」

「詩じゃなくて、ごく率直に、戦争についてどう考えるのかってずばっと聞いてみることにしたんだ。それでもしも、よくあるような忠とか義とかを並べるつまんない答えだったら、トーバー君とはこれっきりにしようって決めたんだ」

「なかなか思い切ったやり方ですね」

「それで〇〇に行ってみたら、トーバー君もちょうどふらつとやってきたんで、ボクはすぐにジョン・クレアのこの詩をトーバー君にも読んでもらって、『戦争ってというのは、それ自体よくないに決まっているけど、戦争を遂行する仕組みって

なんかメチャクチャ汚かったりしません？ 2人ともまた戦場に出たいって思わせるのってひどくありません？ 戦争でトクする連中の悪魔の仕掛けだったりする？ 国を守るとか、故郷を守るとか、愛する人を守るとか、榮譽とか、もうウソばっか並べちゃってさ』って言ったんだ」

「なかなか威勢がいいですね」

「一点突破なんだから、勢いが大事なもの」

「それで、トーパー君とは、もうこれっきりってことになりました？」

「おじさんはそう予想する？ ボクはおじさんと違ってもともと蘇東坡なんかはなんにも知らないから、とにかくやみくもにバーンとぶちかましただけなだけで、おじさんとしては、トーパー君はなんて言ったと思う？ 当ててみて」

イノ君はくりくりと目を動かした。

「そうですね、真面目に予想するとですね、蘇東坡は富弼ふひつという人の名を挙げたのではないでしようか？」

「あれれつ、ホントに当てちゃった。これは驚いたなあ。びっくり栗まんじゅうだ。さすがじゃん。やっぱ、おじさんって、それなりのことがあるんだね。ホームページはチャチでも」

「たまたま知ってることを言ってみただけなんですけど。実は去年の春に富弼が登場する小説を書いたんですよ」

「へーえ、そうなんだ。トバー君の時代って、おじさんは得意なんだ。だったらかわるよなあ」

「得意ってほどではないですけど。当たるんだったら、なんか賭けておけばよかったですかも」

「でも、へ夕に賭け事をするとかオリンピックに出られなくなるよ。とにかく、当たったことをこの録音で確かめてみてくれる。それと、ジョン・クレアの詩集は貸してあげっから、おじさんも読んでみるといいよ」

「えーと、貸してあげるって、これは私が買った本なんですけど」

「そうなの？ これは前回録音してきたご褒美にもらったと思ってたけど」

「ん？ 私がご褒美を出すのですか？」

「だって、おじさんのホームページのためにしているんだよ。〇〇の払いはいつもボク持ちなんだから、この本1冊だけでは、取材費にもならなくて大赤字だよ。今度の分もなんか用意してくれて構わないから。じゃあね」

「えっ、もう帰えるの？」

「今日は宵宮でしょう。うちの組は今年ちやうがしらは町頭の当番でいろいろ役があるんだ

よ」

「イノ君も手伝いに行くの？」

「二応は地域貢献ってことかな」

「そっかあ、立派ですね」

「その分のご褒美もくれていいから。一つも遠慮はしません」

明日の海の日にはこのあたりでは大きなお祭りがある。町頭に当たった組は、

お祭りを支えるさまざまな仕事をすする。

イノ君が帰ってすぐに音声データを再生すると、話の途中でスイッチを押したらしく、いきなり寅さん風の声が飛び出してきた。

あれは、我が姉が結婚するより少し前でしたから、14、5歳のころであったと思います。

「この用兵論は富弼ふひつの独創か、それとも前例があるか」

我が父が私たち兄弟に尋ねました。私が漢かんの時代のある人の名を挙げると、父は満足そうにうなずいてくれました。

我が父が学問で特に重視していたものが二つありました。歴史と易えきです。易は、易者という言葉がありますように、要するに占いです。儒教の基本的な経典の一つに『易経』えききやうという、古くからの占いの知恵を集めた書物があり、父はそれを深く研究していました。私も『易経』についての本を書いたことがあります。

——ということは、トバー君は占いができるの？ ひよっとしたら、うす暗い

路地で占いのアルバイトとかやっていたりする？

① やろうと思えばできなくはありませんけど、実際に占ったことはほとんどありません。占いに頼ったこともありません。『易経』には、古代中国人の宇宙観、人生観が凝縮されていて、私は学問の対象としてそれを研究したのです。父は私よりは占いを信じていたようです。

もう一つの歴史について言うと、母もいまでいう歴史女れきじょでありましたから、いつでもすぐ手の届くところに歴史書がある環境で私は育ちました。虫にやたらに詳しい子とか、アニメにやたらに詳しい子とかいますけど、私は歴史上の人物や事件をやたらと憶えまくる歴史オタクでした。子どもころに歴史の知識がしっかりと脳に定着したお蔭で後で随分と役に立ったものです。

——ボクは、動物とか鳥だったかなあ。恐竜だったこともある。そんな図鑑はっか見ていたんだ。いまでもどのページにどんな動物のどんな写真があったのかはつきりと思い出せるけど、それが役に立ったってことはないかも。

小学校で、読書の時間みたいなものがあって、ボクは鳥の図鑑にすっかり夢中になってしまって、はっと気付いたら、まわりの子はみんな声を揃えて歌っていたんだ。知らないうちに、音楽の時間になっていたんだよね。ジョン・クレアの詩にはたくさん生き物が登場するけど、きっと何もかも忘れてじっと見ていたんだろうなあって思うよ。



父とその用兵論について議論した富弼という人は、実は私が8歳のころから

強く憧れるスーパーヒーローでした。

——えーと、この前、たしか孔子こうしに陶淵明とうえんめいに杜甫とほの3人がいたって言うってたけど、それに富弼も加わるってこと？

① その3人は遠い昔の人で、富弼は同じ時代を生きる4人のスーパーヒーローの1人でした。その名だけを挙げておきますと、富弼かんきに韓琦はんちゆうえんに范仲淹おうようしゆうに歐陽脩です。憧れのスーパーヒーローのうち范仲淹とは生前にお会いすることができませんでしたが、3人とは後に直接お話しすることができました。そのなかで歐陽脩は私のことをかなり買って下さいましたけれど、韓琦は可もなく不可もなしという感じで、富弼に至ってはむしろ不可という評価でありました。

——へーえ、いくらこっちが懂れても、その思いが通じるわけではないんだ。でも、どうして不可だったの？ 何か気のさわるようなことでもしたの？

㊦ 簡単に言えば、詩文をもてあそぶ文弱な軽佻浮薄な輩に見えたということでありましょう。富弼はそういう人間を嫌っていました。フーテンのトーバーへの妥当な評価と言っているでしょう。富弼の人を見る目は確かで、我が弟の方はきちんと認めて下さいました。

ここで余計なことを付け加えるのをお許しください。いま富弼だ、欧陽脩だと呼び捨てにしました。憧れのスーパーヒーローをそのように呼ぶことには強い抵抗があります。しかし、私にとってしっくりくる呼び方をすると、あなたにとつ

てはとてもわずらわしいことになってしまおうでしょう。900年も昔の方々ですから、呼び捨てにする非礼は大目に見ていただくことにしましょう。

昔の中国では、本名を直接呼ぶのは礼に反するとされていました。私の姓は蘇そ名は軾しやくです。私をストレートに軾と呼ぶのは親や皇帝や特別な目上の人だけでした。本名とは別に字あざなというものがあって、通常はそちらを用いました。私の字は子瞻しせんです。より婉曲に地位や任地名で呼ぶこともありましたが。私が翰林学士かんりんだったときは蘇翰林と呼ばれ、密州知事だったときは蘇密州と呼ばれました。東坡居士とうぱこじのような号ごうを用いれば、それで呼ばれることもありましたが。あるいは、国家に対して顕著な貢献があった人には死後に皇帝から諡おくりなを贈られ、敬意を表してそれを用いるのが普通でした。富弼ふんちゆうには文忠の名が贈られましたので、私としては富文忠公とお呼びしたいのです。そのような習慣に基づいたのでは、一体

誰のことなのかあなたにはひどくわかりにくくなってしまうでしょう。

——富弼でも富文忠公でも、どうせもともとボクにはわからないんだから、一つの呼び方で通してくれたら、それで構わないんだけど。

① 評価の低い私でありましたから、富弼と親しくさせていただくことはありませんでした。それでも憧れの思いは変わりませんで、富弼が亡くなりますと、その墓に通じる道に建てる碑に刻む文章を私が書かせていただくことになりました。私が50歳のころのことです。

富弼の生涯を簡潔にまとめた文章を心を籠めて書きました。富弼の一生を通じて何が最も重要なのか、私はそれは用兵論であると考え、そのことが読む人に最

も印象的に伝わるように文章を組み立てました。ここで正直に明かせば、私のその文章は事実をありのままに記したものであったとは必ずしも言えないのかも知れません。

——ん？ それって、もしかして、はっきり言ってしまうと捏造ってこと？

㊦ 私が書いた通りではなかったという証拠はありません。大事なのは後世に何を伝えるかです。最も大切なことが誰の心にも残るように書いたのです。

もう一つ明かしておく、富弼自身にとっては、その用兵論は人生の汚点とまでは言わずとも、あまり回顧してほしくないことであつたようです。我が父にしても、堂々とした正論ではないという捉え方でありました。

——なのにトーバー君が一番大切だって思うんだ。どうして？

① ごく簡単に時代背景を説明しておきます。聞き流してください。結構です。

当時、中国には宋そうの国があり、北隣りには遼りょうという国が、西隣りには夏かという国がありました。郭紘かくりんが戦った相手は夏国でした。国土の広さや経済力で比較したら、夏はごくちつぽけな国でしたが、徹底した軍事国家で、皇帝以下全ての人間が戦争遂行に一丸となって立ち向かってきたために、宋はかなり手こずらされました。郭紘の働きがなければあわやというような場面が実際にあり、そのような状況を見て遼国は、漁夫の利を得ようというのでしよう、筋の通らない理屈を持ち出して宋に領土の割譲を求めてきたのです。NOと言ったら攻め込むぞとの脅

しに、宋の朝廷は動揺しました。

遼国の軍隊は機動力に富み、本格的な戦争をしたら適わないところがありました。これより数十年前に、宋は際どく遼の侵攻を退けて、両国は平和条約を結びました。宋は兄貴分であるという名目を取り、兄は弟に対して毎年小遣いを与えることを約束して、遼は実利を取りました。小遣いはかなり高額ではありませんでしたが、宋はそれで平和を買ったのでした。両国ともにその条約を順守し、長く平和が保たれていました。

遼の突然の変節に、そんな要求などは突っぱねて、戦争で決着を付けるまでだと息巻く連中が大勢いました。それが「正論」だと言えばそうであったのでしよう。しかし、宋が軍事的に劣位にあるのは覆いようのない事実であり、夏国への対応だけで手が回らない状況でありました。たとえ軍事的に優位であっても、わ

ずかな領土の帰属を巡って全面戦争に突入したならば、両国合わせての損失は計り知れないものがあります。遼の要求に屈する恥辱は許せないけれど、戦争を選択すること避けたいと、朝廷の少数の人々は考えました。

このとき二つの要因がからみあった結果、「正論」はひとまず抑えられ、富弼が戦争回避の道を探るべく遼国皇帝に会いに行くということになりました。三つの要因とは、皇帝が優柔不断であったこと、富弼が果敢であったこと、そして富弼を嫌う人々が失敗させてやろうと陰險な罠を仕掛けたことです。

——罠って、どういうこと？

① 皇帝は、理屈からしたら「正論」を選択すべきであると思いはしても、開戦

という重大な決断を下すことができませんでした。それで、遼国との交渉の余地があるのかどうか人を派遣して探らせ、とりあえずの時間稼ぎをしようとししました。宋の代表として遼国に行けば、遼は戦争を望んでいるのだから、その使者を場合によっては殺して兆発してくることも予想されました。それでその役を自ら志願する者は誰もいませんでした。当時の宰相は何かと口うるさい富弼を嫌って、皇帝に富弼を指名するよう助言しました。富弼は果敢にも死を覚悟して遼国に向かったのです。

富弼は遼国の皇帝に会うと、次のように言いました。

「大王様にいま兵を用いることを勧めているのはどのような人々でありましょうか。私は、己の身のために謀る者ではなからうかと危惧いたしております。国家というものは君臣が一体でなくてはなりません。しかし、臣下の中には往々にし

て国家の利益よりも己の利益を先に考える者が混じってしまふのは、歴史上の厳然たる事実であります。我が国においても然りです。戦争になれば、臣下の中で利を得る者が必ずいます。戦場で立てた功名が利に結び付くのはよろしいでしょう。幸い戦争に勝てば、国は土地や財や人を得ます。そのときに、国が得たものをごっそり己のものにして利を貪る者がいます。不幸にして戦争に勝てなくても利を得る者がいます。戦争をするために、国は人や物を動かさなければなりません。それに伴って利を得る者がいます。実際に戦争になれば、国は人や物を費やします。国はそれを補充しなくてはなりません。それに伴って利を得る者がいます。たとえ国が戦争で負けても利を得ることがわかっていれば、その者はいかなる状況下でも戦争をするよう大王様に勧めるでありますよう」。

遼国皇帝は、

「そのようなこともないとは限らぬだろうが、勝利して土地や財や人を得る見込みが十二分にあるのなら、臣下の者は戦争を勧めるべきであつて、己の利だけを謀るとは言えまい」。

「十二分の見込みがありましたも、誰もが必勝を疑わなかつた戦争において、案に相違して大きな禍となつた例は過去にいくらでもありましよう」

富弼はここで遼と中国の間でたびたび繰り返された過去の戦争を振り返り、客観的に見ておおむねは遼国側が優勢ではあつたけれども、ときに遼が思わぬ敗北を喫して、戦場で不運な最期を遂げた遼の皇帝がいたことを思い出させ、

「戦争に勝利して利を得るのは国であり臣下であり、敗れて禍を蒙るのは国であり臣下であります。敗れば国は必ず損失を蒙ります。しかし、臣下の中には自分だけは利を得て、禍はもつぱら国に任せるよう仕向ける者がきつと存在します。

貴国と我が宋は今日までまことに麗しい友好関係にあり、貴国は多くの利を年々得てきました。その利はもっぱら大王様の手の内にあります。平和が続く限り、大王様は何もなさらずともその利を得られ続けます。いま兵を用いるのを大王様に勧める者は何を意図しているのでしょうか。己が利を得て、禍を大王様に任せようとする者ではないと断言できますでしょうか。我が国にはいま百万の兵がいます。大王様には弱兵と見えましようが、我が国も上下心を一つにしています。戦には時の運もあります。貴国が十倍の兵を用いても必勝を得ましようか。勝利されても、失うところの士馬は皆無ではありませんまい。失うものは誰が補充するのでしょうか。大王様がなさるのではありませんか。勝利されて土地を得ても、必ずそれは保ち得るものなのでしょうか。そこより得るものは、通好が絶えなければ我が国から貴国に贈られているものを果たして上回るのでしょうか」。

遼国の皇帝は、富弼の論理にぐらつき、最終的には振り上げた拳を下ろして、兄として支払う小遣いの増額を求めてきました。決着までには、富弼憎しで交渉を決裂させようとわけのわからない画策をする者もいてかなり難儀な経緯をたどりましたが、小遣いの増額で戦争は回避されたのです。

失われたかも知れない何万もの兵士の命、破壊されたかも知れない何百万もの民衆の暮らしを、富弼は救ったのです。いくら特筆して足りない偉大なこの功績を、富弼自身は恥ずかしいこととして、自分の前でこのことについて語るのを終生誰にも許しませんでした。

我が父は、富弼の用兵論は一種の詭弁で、愚かな遼国皇帝にうまくいっばい食わしたという受け止め方をしていました。しかし、宋の面目はつぶされてしまったことには変わりがないので、機会を得ていつか必ず恥を雪ぐべきだと考えてい

ました。このずっと後に、遼国内にちょっとした混乱があったときに、いまこそ遼国を攻めるべきだと、かなり勇ましい文章を書いて皇帝に提出しました。その文章の中で、弟に与える小遣いは宋国の民の重い負担となっていて、富弼の和平交渉の結果、民衆はさらに苦しめられることになったので、早急に遼国を懲らしめて、小遣いなどやらないですむようにすべきだと強く主張しました。これはまさに富弼が恥とする核心を衝いたものでした。

私も父の影響を受けて、遼国に与える小遣いについては同じように捉え、若いころには、遼国や夏国に対して強い姿勢で臨むべきだと主張したこともありました。郭綸の詩にはそのような思いが反映されていますし、実際に戦場に立つことを想定して武術の鍛錬をしたこともあります。

——へーえ、本当に文弱ってわけでもないんだ。

それで、いま聞いたことを整理すると、富弼が言ったのは、自分の利益のために戦争を起こしたがる者がいて、皇帝とか国家とか人民とかの利益にはならなくて、戦争になってしまうことがあるってことだよ。なんだかんだ理屈をつけたところで、戦争遂行のメカニズムは欺瞞に満ちているってことだよ。損得勘定だけでみたら、一部の人間にとっては利益になることであっても、正しく全体で損得勘定をしたら、戦争なんかしない方がいいに決まってるんだよなあ。

① いまでもそうかも知れませんが、当時は全体の損得勘定をする手法がありませんでした。遼国に毎年与える小遣いは決まっています、積もり積もつての総額は容易に計算できました。だから、それだけ宋が損をした、民衆に負担を強いたと、

我が父を始めとして多くの人がそう指摘しました。しかし、平和が維持されたことによつて得られたものがどれだけあったのかという勘定はされませんでした。宋の経済が安定的に成長し、遼国との間の交易がさかんに行われ、出費を遥かに上回る利益があつたはずなのです。当時はそのような経済効果を計る手段がなく、私もそこまで思慮が及びませんでした。

我が父が戦争を勧めた意見書は取り上げられずに終わりましたが、後に皇帝が代替わりをしたときに、若い皇帝とそのブレーンたちは、長年苦しめられてきた夏国に対して戦端を開こうとしました。相手の国力に衰えが見え、この機を逃すべきではないとの判断でした。そのとき私は42歳になっていて、地方官として働いていました。朝廷のある高官が、皇帝に戦争を思い留まっていたりするための意見書を書いてくれないかと私に依頼がきました。私はその人に代わつて筆を執

り、特に意を注いだのが皇帝の情に訴えることでした。

戦争をして幸いも勝利して、どのようなことになるかと、次のように書きましました。

「そのとき陛下は、凱旋將軍の勝利の報告をお聞きになり、勝利を祝う臣下の声をお聞きになりました。陛下はお耳から入るたくさんの声に大いにお喜びになるでありますよう。

しかし、陛下のお目は、遠方の民の臟腑が白刃によって切り刻まれ、遠方の民の筋骨が輸送の労役に耐えられずに絶ち切られ、民が暮らしを失って流浪し、息子や娘を売り払うのをご覧になることはありません。あるいは兵士が肘を折り、目を潰され、絶望して自殺するに至るありさまを、陛下のお目はご覧になることはありません。そして、慈父が泣き、孝子が泣き、孤臣が泣き、寡婦が泣くのを、

陛下のお耳はお聞きになることはありません。遠くの地では人の命がかようなありさまにありましても、陛下はお喜びになられるのでしょうか」

このときの私の文章は、別の箇所で皇帝の注意を引いたようだと人づてに聞きましたけれど、この部分が皇帝の心を動かしたということはありませんでした。

——それで、実際に戦争は行われたの？

㊦ 残念ながらそうになりました。宋は緒戦で勝利したものの、結局は多くの生命を奪い、多くの生活を破壊して、得るものは何もありませんでした。

私はまことに文弱です。年齢を重ねるともにその度合いを増したようです。たとえ「正論」であっても、たとえ損得勘定が合っていても、敵味方の区別なく、

生命に危害を加え、兵士と民衆に苦しみを与える戦争に私は価値を見出すことができません。恥辱を蒙ろうが、詭弁であろうが、戦争を回避した富弼の用兵論に私は高い価値を置きます。富弼には評価していただけなかった私であっても、この一点をもって富弼をこの上なく尊敬するのです。

現在の地球上には内戦によって生きる場を失ったたくさんさんの難民がいます。私の時代とは異なり、難民の困窮するありさまを目で見ることができ、難民の泣く声を耳で聞くことができます。それでいながらどうして戦争をいつまでも続けるのでしょうか。900年も昔に書いたことを、いまもって繰り返さなければならぬのではないかと、人間の世とはいかなるものなのでしょうかと。

——なんか、トバー君、熱くなってきたみたい。大好きなライチサワーでも頼

みますか。

① 人間の歴史はよりよい方向に進んでいるのでしょうか。あなたはどう思いますか。

——たぶんボクが30年か40年早く生まれていたら、日本の高度経済成長期を経験して、未来はますますよくなって行くと楽観的な気分にもなれたのだろうけど、いまのボクにはそうは思えない。世界の多くの人々も、歴史上の多くの時代の人々も、未来はますますよくなって行くという気分はなかなか持てなかったのではないのかなあ。この前、昔の中国人は理想の時代は遠い昔にあったと考えていたってトーバー君は言っていたけど、それって、いま生きている時代がつかなくて、

これからよくなる見通しもないからってことなんじゃないのかなあ。

㊦ 「天道、是か非か」という古い言葉があります。司馬遷しばせんという人が書いた『史記』

という歴史書にあります。『史記』は太古から漢の時代までの歴史を記した大部の著作で、歴史オタクであった私はそれを何度読んだかわかりません。

「天道」とは、前回お話した「道」、つまり宇宙の基本原則です。宇宙の基本原則というと、いまでは物理学の法則を思い浮かべ、たとえばアインシュタインの方程式とかをイメージするでしょうか。物理学の法則がわれわれ人間の運命に係するとはほとんどの人は思わないでしょうけれど、昔は天の道は人間の運命にまで関わると考えていました。だから、天の道の指し示すところを先に知ろうとする占いが発達したのです。

司馬遷は歴史を記述する過程で、人間としてまことに立派であるのに不遇の死を遂げた者がいる一方で、人間としてまことに卑劣であるのに富貴を極めたり長寿を全うしたという、理不尽なことがあまりに多いので、天の道は果たして人の世を正しい方向に導こうとしているのか、それともそうではないのかと、大きな疑問を抱きました。それが「天道、是か非か」^{てんどう せい ひ}です。

私が生きた時代、とくに若いころは、天の道はやはり正しいと思えるような幸運な時代だったようです。私たちの宋の時代は、中国の歴史の中でも、あるいは世界の歴史の中でも、突出していた部分があったように思います。残念なことに、日本の高度経済成長期が永続しなかったように、私たちの良き時代も長くは続きませんでした。やはり「天道、是か非か」と問わねばならないのでしょうか。

——たぶん、問題は天の道にあるのではなくて、人間にあるんだと思うよ。「人道、是か非か」でしょう。

いま思い出したけど、ボクの卒論のテーマは「自然は愛に満ちているか」だったんだ。口にするとなんかとっても恥ずかしい感じだけど、ジョン・クレアの詩に、自然は愛に満ちているって歌っているところがあるんだ。だから、ジョン・クレアは自然からたくさんの詩を拾い上げることができたのだけれど、人の世はそうではないんだ。それで、ジョン・クレアは次第に世の中から阻害されていると感じるようになるんだ。そんなような軌跡をたどろうとしたのがボクの論文だったんだ。

いまの地球を見ると、温暖化とか生物多様性とか放射性廃棄物とか、ほかの生物はちゃんと生きているのに、人間だけがとんでもないことをしているって思っ

たりもするんだ。地球の上で人間だけが悪者の仲間はずれで、しかもボクなんかは人間の中でも仲間なはずれで、生きていたらいけないような気になってしまった。高校生のころからそんな気持ちが強くなって、そんなときにジョン・クレアの詩に出合ったんだ。

だから、つまり、ボクのいまの気分で言うと、人間の歴史は悪い方に向かってるってことになるかな。

① いかなる時代に生まれ合わせたかで、人はやはりかなり影響を受けます。私は「天道、是か非か」の問いには「是」と答えたい気分が強くなります。流罪を経験してもそれは変わらず、むしろ強くなりました。最初のお聞きいただいた海南島を出るときに詩には、実はそのような思いがこめられていました。

ひどい降り方だった雨も、吹き荒れていた風も、ぴたりとおさまり、
みごとに晴れ上がった。

月があかあかと照り輝き、

その光を雲がかげらすことはもうない。

天と海は、

もともとの澄んだ清らかさを取りもどした。

この部分は「天道」への信頼感を歌ったものだったのです。

——へーえ、そういう意味が籠められていたんだ。嵐がやんで美しい夜景になっ

たということだけで聞いていたけど。詩だから、いろいろな意味合いがあるんだよね。

㊦ その一方で、ジョン・クレアが抱いた疎外感に近いものを私も感じたことがあります。この前の続きをお話すると、そんなことを詠んだ詩も出てくるでしょう。

——そうだね、続きだよね。最初にボクが戦争についていきなり質問しちゃったんだけど、トバー君としてはこの前の続きを話す気でいたんだよね。腰を折っちゃったみたいでごめんね。

それと、この前は、最後のときに、トバー君の様子がちよっとおかしかった

んで、気になっていたんだ。「我が生涯」を語ってくれなんて頼んだのが悪かったかなあって、反省したりもしたんだ。

ⓧ この前は、「遊たびの奇絶きぜつ」を順序立てて始めようとしたところで急に打ち切ってしまったて失礼しました。いろいろな感情が湧き上がってきて、そのまま続けるのが難しくなってしまったのです。店を出てからも感情が渦巻いて、いつしか、「私とは何者であったのか」という自問自答の大嵐となつて、私はその中でもみくちやになつてしまいました。900年も経つていまさら「私とは何者」などは、とんだお笑いでありましょう。

——へーえ、トバー君みたいな年齢なつたら、そんなのはとづくに卒業かと思

ってた。「自分さがし」っていう言葉がちよっと前に流行って、あんまし好きじゃなかったけど、自分っていうのはホントにわからない。捜すまでもなく自分はここにいて、だから、とつてもやつかないんだよ。「私は何者か」って、中学、高校のころ、いっぱい考えたけど、さっぱりわからなかった。あんときの気分を思い出すと、なんかつらくなる。いまもって答えなんかないけど、以前みたいに真剣に考えたりしなくなったのは、自分が鈍くなったってことかもね。いまもって「私は何者か」って悩むのって、トーパー君ってふつうではないのかも。

㊦ 突然ですけど、あなたはDNAをご存知ですよね。

——今日はアインシュタインとかDNAとか、トーパー君みたいな古い人にそん

なことを言われたら、一応ボクはこれでも21世紀を生きる現代人なんで、どつちもよく知ってますよって答えられないとダメだよ。ボクは文系だったから、物理は苦手でも、高校では生物を取ったんで、DNAなら習ったことは習いましたよ。

① 私が生きていた時代には、もちろんDNAは誰も知りませんでした。DNAに相当するようなものとしては「性」というものが考えられていました。雌雄の性ではなくて、「本性」というときの「性」です。私の本性は鹿であると、この前、言ったように思いますが、本来私は鹿として生まれるべきだったのではないかというのが私の感覚でした。人間の本質を規定する何か根本なものが「性」です。「性」は天から与えられ、皇帝でも庶民でも異国民でも「性」の基本的なありよ

うには変わりはありません。

——ちよつと待って。また「天」が出てきた。「天から与えられた」ってどうい
こと？ 「天」というのは単なる空とか宇宙ではではないんだよね。神様みたい
なもの？

㊦ 私たちがいまいる3次元の空間に時間をプラスしたのがアインシュタイン
のいう4次元の時空間です。虚ろな時空間に物質が散らばっているのが宇宙とい
うイメージでしょう。私たちがいう「天」は虚ろな時空間ではなくて、生成流転
を繰り返す何物かに満たされていて、人や生き物などは生成流転の目に見えるこ
との一部の表れです。「天」の生成流転の中で私たちは生きているので、天の「道」

が我々の運命に関わってくるのです。遠くの神が我々の運命を司っているというイメージとはまるで異なります。言ってみれば、神から人格的なものを極力除いたものを、そこらじゅうにばらまいたのが「天」でありましょうか。私たちの「性」はまさに「天」の一部であるので、「天」から与えられたという表現をしたのです。

そのような「性」がDNAのように物質的基盤を持つものであるかどうかといったことは思索の対象とはなりません。人は誰もがDNAを持ち、その基本構造は同じであるように、「性」もその基本は誰もが同じであると考えていました。孔子は偉大な導き手であると申しました。孔子がどれほど偉大であっても、特殊な「性」を天から与えられたわけではなくて、私たちと違いはありません。だから、われわれも努力すれば、誰もが孔子に近づけるはずだというのが私たちの考え方でした。この点でも、私たちは未来に向けて楽観的でありました。

天が与える「性」には普遍性があるので、空間的も時間的にも人間は本質的に平等であると考えていました。人間のDNAは何万年も前からほとんど変わっていないといえます。私の時代にスマホはありませんでしたが、宋そうの片田舎に生まれた子供でもこの現代社会に連れてきて育てれば、普通にスマホが使いこなせるようになるでしょう。逆に、現代に生まれた子供を宋の都に連れて行って教育すれば、当時の宰相になることもありうるでしょう。

一方で人間には個性があります。世の中にはいわゆる善人もいれば悪人もいます。同じ「性」を与えられていながらどうしてそのような相違が生じるのか、私たちの時代には十分に説明することができませんでした。誰もが孔子に近づけるはずなのに、実際の人間が大きく異なるのは、教育の不足、あるいは努力の不足によるものだという理解の仕方を一応はしていました。いまは、教育や努力も大

切であるとともに、個性の源はDNAの多様性にあるという理解でありましょう。私のDNAは地球の歴史でたった1回だけ出現し、景祐3年12月19日に生まれた蘇軾ソシトクという人間に宿りました。同じDNAが現代に出現したらどうなるでしょうか。宋の時代の蘇軾と現代の蘇軾の生きざまを比べることがもしもできるのなら、歴史の呪縛から解き放たれて、私とは本当は何者なのかということがはっきりとわかるようになるのではないのでしょうか。

——クローン人間を作れば、そういう比較だってできなくもないだろうけどね。あんまり意味があるとは思わないけど。だって本当はトバー君が何者なのか、そこまでして知りたいとは誰も思わないもの。

① その通りです。「自分が何者なのか」という問いは、自分にはとても大きな意味があつても、他人には「今晚のおかずは何にする」という問いの方がずっと大切でありましょう。

この前、「遊たびの奇絶きせつ」を語り始めましたけれど、900年前に私がどのような生きたのかなどということは、元来、あなたにとってはどうでもいいことです。900年前がどのような時代で、そのときに私が何をしたなど、あなたに限らず、900年も経てばどうでもいいことばかりです。でも、900年経つても、すべてがどうでもいいことばかりではなくて、もしかして、あなたにとって何かしら関心をひくようなことがあるとしたら、それはどのようなことでしょうか？ あなたはなんだとお考えになりますか。

——そうだなあ、難しいことはよくわかんないけど、二つあるかもね。一つは、最初に聞いたみたいに、戦争を起こすメカニズムのような原理的というか、本質を見抜くようなこと。そういうのは、いまだけを見ているよりも、歴史に照らした方が見えやすいってことはあったりするかも知れない。

もう一つは、さつきトバー君が言った、情に訴えるっていう部分。900年経ってもDNAはおんなじなんだから、人間の気持ちっていうのは、きつと変わらないんだと思う。ジョン・クレアの詩にボクが魅かれたのもそこなんだろうなあ。感情っていうのはちっぽけそうだけど、一番大切だったりするんだよね。

ボクはいまは介護の仕事をしてるんだけど、よく聞かされたのは、認知症とかが進んでも、感情は最後まで残るって。だから、その人の気持ちを尊重することがケアの一番の基本になっているんだ。感情っていうのはきつと人間の一番奥深

いところであって、900年経ってもそれは変わらないんだと思うよ。

だから、郭絳綸がせつかく手柄を立てたのに、わびしい暮らしをしているのって、どんな心持ちなんだろうかっていうのは気になるもの。ジョン・クレアの詩の傷痍軍人の詩も同じ。その2人の気持ち、なぜか次の戦いを夢想するところに行ってしまうのって、なんかとってもいやな感じがするんだ。ひどいすりかえじゃないかって。それで、戦争を起こすメカニズムについて聞いてみたんだ。

世の中には、下積みの苦労ばつかしさせられてちっとも報われない人って大勢いるよね。その逆に、愚にも付かない連中が偉そうに楽しくしているっていうのもいくらでもあるよね。ボクだって、いろんな思いをして何度も辞めたもの。ボクのことなんかつまんないどうでもいいことなんだけど、でも、なんかそういった感情って、本当はとっても大事だっていう気がするんだ。

Ⓣ いまあなたは「愚にも付かない連中が偉そうに楽しく」と言われましたけれど、この私こそがまさしく「愚にも付かない連中」の1人でした。あるいはジョン・クレアの批判する「囲い込み」をする側の人間であったのです。そのような思いが湧いてきて、前回は話を中断してしまったのです。

——そうなの？ トーバー君って実はそういう人だったの？

Ⓣ 恥ずかしながらそうだったのです。流罪になったことで、どつぷりと「愚にも付かない連中」であることにつかっていたところからかろうじて首うぐらいは出せることができたのだと思います。そのことをお話するには、前回の続きから

始めていかなければなりませんね。

——気長に聞く必要があるってことかな。この店がつぶれなければ、ボクはここにくるだろうし、どうせトバー君は暇なんだろうから、テキトーに付き合おうちに、話も進んで行くよね。まさかもう1回900年かかったりはしないよね。

だけど、トバー君も、ボクなんかを相手に、べらべらしやべっているのって、なんか意味があるのかなあって逆に気になるけど。トバー君くらいに見識のある人は、世の中をよくするために、もっと目立つところで頑張ってもらった方がいいかもって気がする。だって、ホントは超有名人なんだから、ど派手に「中国3000年の叡智！ 天道、是か非か？ 史上初の仙人ライブ！」とかなんとか打ち出して、そこらの野球場を借り切って、ばんばん花火を上げてさ、歌って踊

って、平和を訴える活動とかやったらどうかと思いますけど。

① 歌うのは、私は有名な音痴なので、人様の迷惑になりましょう。それに90

0年以上も昔の人間があんまり出しゃばるのもどうなのでしょう。

私は私なりに、一応はひそやかな活動をしているつもりではいます。あなただけを相手にばあばあ適当なことをしゃべっているのではなくて、昨日はウズベキスタンのサマルカンド、一昨日はコスタリカのサンホセで、その前はケニアのナイロビでという感じで、あちこちで話をするというくらいのはしているのです。

——へーえ、そうだったんだ。仙人ならどこへでも行けるってことか。言ってみ

ればインターネットみたいなものかな。まさにネットサーファーだ。

㊦ では、前回の続きですが、我が父が私たち兄弟を呼んで郭綸に挨拶させたとき、私たちについて本当のことを父は郭綸に告げませんでした。そのとき私は特に何も感じなかったのですが、郭綸と私たち兄弟の間には深い溝というべきものが存在していたので、私たちが「愚にも付かない連中」の1人であると知ったなら、郭綸は口を閉ざしてしまうと父は考えたようです。「愚にも付かない連中」がよくありがちなように、そのときの私には「愚にも付かない連中」であるとの認識がありませんでした。

——どんなふうに愚にも付かなかったの？ 溝って、どんな溝？

㊦ 郭綸には命がけで国のために戦った立派な功績がありながら、現在のわびしい暮らしが好転する見込みはまるでありませんでした。一方で、私たち若い兄弟は国のためにまだ何一つしていなかったのに、前途洋洋たる確実な未来がその前に開けていました。可能性だけをいえば宰相に昇ることもありえました。宰相というのは国家の中で皇帝に次ぐ地位です。皇帝はその血筋の者でなければならぬので、一般の人が昇り得る最高の地位が宰相でした。そのような私に、郭綸の心持ちがわかると言ったら、傲慢のそしりは免れないでしょう。前回の私の詩は、両者の間にある深い溝に無自覚であった私が詠んだごくおそまつなものであったのです。

——えーと、この前聞いたところでは、トバー君の家はとくに裕福ではなかったんだよね。生きる基盤を都に移すために旅に出たと言ってたけど、「前途洋洋」ってどういうこと？　なんか急にいいことでもあったの？

ト

嘉祐^{かゆう}4年10月に故郷の眉山^{びぜん}県を船で発つて都に向かったのが最初の旅で

あると、その話を始めたのですが、実はその3年前にも都に行っています。だったら、それが最初の旅ではないかということになるのでしょうか、それは科挙^{かきよ}という試験を受けるためのもので、それに合格してからが私の本格的な人生であるとの認識が私にはあるものですか、嘉祐4年の方を最初の旅と位置付けているのです。

——科挙の試験っていうと、昔の中国には、えらく難しい試験があつて、超受験地獄だつたつて聞いた気がするけど。

ⓧ 私の時代に限らず、昔の中国において、科挙の試験は非常に大きな意味を持っていました。科挙は国家の仕事を担う官僚に採用されるための試験です。たとえば、あなたの国の国家公務員試験と司法試験と国会議員選挙を一つにしたようなものであると言ったらかなり近いでしょうか。選挙は当選しても任期は短いのですが、科挙は一度の合格で、上級官僚に仲間入りできて、最終的には宰相にも昇れる可能性が開けたのです。

900年以上も昔の中国ですから、家柄が幅をきかせていたと思われるかも知れませんが、試験に合格すれば家柄などまったく関係ありません。宋より一

つ前の唐王朝とうに時代までは、家柄が何よりも重要視される貴族がいましたけれど、宋の時代には貴族はいませんでした。宋は実力社会で、科挙の合否は人生に決定な差異を生み、合格者の中でも試験の成績がその後の昇進に影響しました。トップ合格は状元じょうげんといわれて最高の榮譽とされ、状元を含む上位合格者は進士及第しんしきゅうだい、下位者は同出身どうしゅうしんと区分され、明確な線が引かれました。宰相にまで昇れるのはほぼ進士及第に限られました。

私と弟は同時に試験を受けました。科挙は三次試験まであり、一次試験は普通は郷里で受けるのですが、私たち兄弟は最初から都で受けました。二次試験からは都に受験生を集めて行われました。その年の科挙に何人が挑んだのかはよくわかりませんが、10万くらいいたかも知れません。最終的に合格者したのは877人で、成績上位の262人が進士及第となりました。ちなみに、私は第6

位、弟は第15位でした。

——えーつ、10万人受けて第6位って、すごくない？ しかも兄弟揃って合格って、超優秀ってこと？

㊦ 科挙に1度の受験で合格し、しかも上位であったことから、若い私は天狗になりかけていたのは否定できません。20年も30年も受験勉強を続けても合格できずに年老いてしまった人もたくさんいましたので。

——トバー君はどこで受験勉強したの？ 当時、学校とかあったの？ さっき、お父さんが歴史と易を重視したと言ってたけど、お父さんに習ったっていうこ

と？

① 本格的に勉強を始めたのは8歳のときでした。数えて8歳ですから、いまの小学校1年生とほぼ同じでしょう。私は父に連れられて、張易簡ちやういかんという先生の「小学」に弟子入りしました。「小学」というのは、いまでいえば子ども向けの学習塾、昔の日本でいうなら寺子屋のようなものでしょうか。眉山県の町に天慶観てんけいかんという道教のお寺があり、その片隅に北極院という建物があつて、張先生はそこに近隣の子弟を集めて読み書きを教えていました。

——へーえ、900年前にそんなふうな教育が行われていたんだ。裕福ではなかつたって言うんだけど、子供に勉強させるぐらいの余裕はあつたってこと？

㊦ 裕福でないからこそ、無理をしても、子供の教育に熱心になるといふことはいつの世でもありましょう。父の場合には、また後で申し上げるようになりますが、かなり屈折したところがあって、どんなことをしても私たち兄弟にしつかり勉強さようとの強い思いがありました。

それと、眉山県には子供たちに学問を習わせようとする文化風土がありました。張先生の寺子屋にはいつも100人を超える生徒がいました。田舎町にそれだけの規模の学校があったのは珍しいことであつたと思います。

その文化風土についてちよつと申し上げておきますと、眉山県はいまの四川省しせんにあります。Googleの衛星画像などを見ていただくとわかるように、四川省はぐるりを山地に囲まれた大きな盆地です。盆地というのは、よそとは隔絶した閉鎖

空間になりやすいというのは容易に想像できましよう。歴史的に見て、中央の統制が弱まると、この盆地には独立政権が生まれ、三国志時代の蜀の国しよくがその典型でした。それで、われわれ四川盆地の人間は、蜀人しよくじんであるとの意識を強く持っていました。日本でも長野県の人が信州人であることを誇りとしているのに似ているでしょうか。

宋の前の唐の時代の終わりに、都であった長安ちやうあんの周辺では戦乱が相次ぎ、文化の担い手たちは比較的平穏であった四川盆地に逃げ込みました。唐王朝が滅んでからは蜀に独立政権ができ、数十年以上にわたって、唐の文化の命脈は蜀の地において保たれることになりました。その後、宋王朝が天下統一に乗り出すと、蜀にあった地方政権は文化の水準は高くても軍事的には弱かったためにあっけなく倒されてしまいました。そのとき蜀にあった文物はそっくり宋の都に持ち去られ、

蜀の地にひどい圧政が敷かれたために、抵抗する民衆が各地で立ちあがり、一時期は再び独立政権が生まれるかという寸前にまで至りました。宋の朝廷は深く反省して融和策に切り替え、蜀は徐々に統一王朝の中に溶け込んで行くようになりました。それでも、蜀の人々の心には、武力では屈したけれども、文化では決して負けないとの思いが強く残り、それもあつて眉山県では子弟の教育が熱心に行われていたのです。

私は蜀が統一されてから70年後に生まれました。それでも蜀人としての意識はかなり強固なものがありました。言葉が違うのも大きかったです。詩や文章を漢字で記せば中国のどこでも同じで完全に通じます。しかし、声に出して読んだら発音が異なります。口語はいまの中国でもかなり地域差がありますが、当時はもつともつと大きな違いがありました。

——ということ、都の連中の鼻を明かしてやろうとトバー君は一生懸命に勉強して、試験で抜群の成績をとったってこと？

ト そういふ面もなかったとはいえないでしょうけれど、それよりも、我が父の学問観の正しさを証明したいとの思いの方がずっと強くありました。父は歴史を重視したと申しました。歴史を学ぶのは単に古いことを知ろうというのではなく、父は孔子と同じく、理想の社会を作って行こうとする実践を重んじていました。いま何が課題なのか、現状を打破して改革を進めるのに何が必要なのか、それを知るには必ず歴史を学ばなければならぬと父は考えていました。歴史の研究から物事の根本原理を抽出し、その原理に則って現在の問題を分析して解決

策を見出すというのが、父が打ち立てた基本公式でした。

実は父は科挙を受けて失敗しています。当時の試験で重視されていたのは、暗記力、含蓄のある古典語を華麗に並べる技術、音律的センスの三つでした。試験ですから暗記力が問われるのは避けられないところですが、普通の暗記力ではなくて、古典の経典を一字一句間違えることなく記憶していることが求められました。科挙には論文記述式の課題があり、その答えは内容よりもむしろ上辺の美しさが重要視されました。また、提示された題に従って賦ふという韻文を作るこゝとが大きな比率を占めていました。科挙は人の一生を大きく左右する試験ですから、不正があつてはなりませんし、採点基準があいまいであつても困ります。暗記力、内容よりも外面、韻文作成技術といった一律に判定しやすい方向へと、試験のあり方がシフトして行ったのです。

不合格となった父は、こんな試験に合格したところで、国ため民衆のためにいい仕事ができるはずがないと強く反発し、郷里に帰って、真に役立つ学問とは何かということを探究して、歴史重視に到達したのでした。

張先生のもとに私が入学したのは、父がまだ真の学問を求めて苦闘している最中でしたので、とりあえずはほかの子供たちと変わることなく勉強を始めました。

——さつき、学校は道教のお寺にあつたつたけど、道教というのはなんかの宗教だよな？

㊦ それも説明しないといけなかつたですね。道教というのは中国に古くから伝

わる宗教です。横浜の中華街に横浜媽祖廟まそびやうがあります、これは媽祖という神様

を祀っている道教寺院です。媽祖は、私よりも数十年ほど前に、海辺の町で官吏の林りんの家の娘として生まれといわれています。生まれてひと月、泣き声をまったくあげなかったことから『林黙娘』と名付けられ、28歳で天に昇って神となり、神通力をもって海で難破した人々を救い、航海の神様として広く信仰を集めるようになりました。歴代の皇帝にも敬われ、道教の神様の序列の中での地位を上げて、ついには最高位に並ぶまになりました。もつとも、道教にはたくさんの方様がいて、その序列は教団によって異なります。

どの教団でも、序列の第一位は、道教の始祖とされる老子ろうしです。老子には太上老君たじょうこうくんという神様としての名もあります。現在では、老子の実在性は疑わしいとされていますが、私が生きていたころには、老子は孔子とほぼ同じ時代を生きていたと信じられていました。その老子が書いた『道德経』が道教のいちばん重

要な經典で、張先生の寺子屋でも、『論語』のような儒学の經典とともに、老子の『道德経』をよく朗唱していました。

それで一つ思い出したことがあります。私が60歳を超えて海南島に流されていたとき、ある夜のこと、夢で私はいつしか眉山県の天慶觀の北極院に入り込んでいました。見ると、張先生が昔のままの姿でおられ、子供たちが先生の前で声を揃えて『道德経』を読み始めました。なつかしさのあまりその声に耳を傾けていますと、

げんのまたげん しゅうみょうのもん

「玄之又玄、衆妙之門」

という箇所に来て、急にはっと気づくことがあって、先生に問いかけました。

「妙というからには一つだけのはずなのではありませんか。どうして衆なのでしようか」

——あのう、口をはさんではなんですけども、ゲンゲン、ミヨウミヨウとかいわれても、チンプンカンプンでございますよ。

㊦ 失礼しました。つい思い出すままに話してしまいました。むろんここは説明がいらいますね。

玄けんとは、もともとは黒を意味します。黒くて目に見ることができない神秘的なもの、それが玄けんです。「玄之又玄げんのまたげん」とは神秘のさらなる神秘ということです。妙みょうとは、見えないけれども、ものの本質としてあるものです。「衆妙之門しゅうみょうのもん」とは皆さんの妙が出てくる門ということ。つまり、「玄之又玄げんのまたげん、衆妙之門しゅうみょうのもん」とは、神秘のまた神秘からあまたの本質が湧き出てくるというような意味です。私も子

供のころにこの部分を何度も朗唱していましたけれど、改めて聞いてみて、本質というからにはそれは一つであるべきではないのかと思つて、先生に尋ねたのです。

張先生はにっこり笑い、

「二つつきりではつまらなくはないかい。つまらないのでは、本質というほどのものではないだろう。だから、たくさんあつた方がいいではないか」

それを聞いて私の心はからりと晴れたような気がしました。そのとき私は罪を得て海南島に流されていました。私のしてきたことが正しいか正しくないか、本質が一つきりなら、答えは一つでしょう。しかし、本質が一つでないのなら、答えは一つに定まらなくていいのです。世には一つしかないとして、ある一つだけにしがみついていたら、小さなところに閉ざされてしまいます。本質がたくさん

あることで人生は広く豊かになるのではないでしようか。

——なるほどねえ、そんな気もするけど、人間って、これが絶対に正しいんだと思いついて、思い込めたら、迷わなくて強いのかもって思うんだ。一つ信念があった方がびしっとしてカッコよさそうだしね。さっき言ってた「軽佻浮薄」とは逆だよ。一つに決まっていれば、安心して楽しね。でも、つまらないような気は確かにする。ボクなんかはさ、何かに強くこだわったりするときにあって、そのうち急にそんなことどうでもよくなったりして、なんかソーンしたような感じになったりするんだ。わけわかんないけど。

① ついでながらも一つ、寺子屋の思い出話をします。これは海南島に流され

る少し前のことで、やはり夢を見ての詩です。

私は夢の中で小学の教室に入って行った。

自分の頭の半分はもうとくに白髪になってしまっているのを忘れ、

子供たちと同じあけまき総角であるような気分で、

ほかの生徒と声を合せて『論語』を朗唱した。

人の世の浮き沈みなどは子供の遊びのようなものだとよくいうけれど、

夢と現実がひっくりかえって、

老人が子供に返るくらいのが起こっても、

造物主のちょっとした戯れとして、

この世界ではさして珍しいことではないのかも知れない。

ただ一つだけ真実があるとしたら、

酒に酔ったときの人間の精神は、

何らさわりのないぽっかりとした空洞のようなものだということではなかるうか。

酔っ払いが馬車から落ちても怪我をしないのは、

その精神が完全な状態にあるからだ、

莊子そうしが言ったのは、まことに正しいと思う。

そこで私は酒を呑んでいい具合に酔っ払ってくると、

息子を呼んで酔人のごたくを記録させるのである。

いまあなたとこうしてしゃべっていることが、まさに酔っ払ってのごたくです。

それをあなたのおじさんとやらが文字に直してくれて、チャチなホームページに

載せてくださるとは、まさしくこの詩で私が息子にさせていたことそのままでは
ありませんか。実に愉快です。

——えーと、酒に酔ったときの人間の精神が完全だつていうのは、どういうこと？
酒を呑むと、建て前みたいなものがはがれ落ちて、本心が出てくるっていうよう
なこと？

㊦ これは『そうじ莊子』という書物に書かれていることです。老子と並んで道教の始
祖とされるそうし莊子という人がいて、その人が『莊子』を記したということになって
いますが、実際に莊子本人が書いたのはその一部であつたようです。

私のいまの詩では、『莊子』に書いてあつたことを少しばかり曲げて用いていま

す。『莊子』では、精神が完全な状態にあれば、寿命の長さであるとか運命であるとか、自分ではどうすることもできないことに惑わされずに、自分の生を全うできるといふことを論じていて、酔っ払いが疾走する馬車から落ちても怪我をしないのは、自分が車に乗っていると、そこから落ちてしまったとか、そんなことをまるで意識しない状態にあるからで、精神が完全であるとかのようになるのを知る一つのいい事例になる。酒に酔うだけでもこれほどの効果があるのだから、天の道と一つになって精神を完全にすれば無限の効果があるというのが『莊子』の主張です。宇宙の基本原則である天の道と自己を一体化するのが道教の求める最高の境地です。

私の詩では、造物主という言葉を用いていました。これは天の道をいくらか擬人化した言い方です。キリスト教の神様のような万物の創造主がいると道教で考

えていたわけではありません。

——そっかあ、酒にはそんな効用があるのか。なんかうれしいかも。もう一杯、ライチサワーを注文しようか。

㊦ さらについにながら、もう一つ少年時代を回顧した詩があります。いまの詩よりも数年前に、晁説之ちやうえつしという若い友人が昔の牧畜のありさまを描いた画を見ての感想です。

私はかつては農地で日々を送っていたので、

牛も羊もよく知っている。

故郷のあたりの川べりは平坦で、

牛の背にまたがると、

大船に乗ったかのようにゆるゆると穏やかに進んで行ったものだ。

船を操る人がいなくても、

岸が自然と移り変わって行くように、

牛の背で私が書物を読みふけていても、

牛は勝手に歩んでくれた。

牛の前には百匹の羊がいて、

鞭をびしっと打てば、

軍団の兵士が陣太鼓に反応するように音に従うのだけけれど、

私は書物を読みふけるばかりで、

遅れる羊がいるのにふと気づいたときだけ、

ひよいと鞭を打った。

川べりの草は丈高く伸び上がるのだが、

そればかり食べさせたのでは牛も羊もよく育たないと聞いたので、

山の中へと入って、

谷や窪地を越えて草を食べさせた。

駆け上がったたり跳び上がったたりして、

牛も羊もそして私も筋骨がたくましくなった。

雨の日にも、蓑笠を付けて林のあたりを歩んだこの私も、

老いたいまとなつては、

この牧畜の画をぼんやりと眺めるだけだ。

いま世間の風当たりは強く、

牛の耳に念仏ではないけれど、

私の声を聞いてくれる者はいない。

あのころのままに牛飼いの翁とならなかつたのを、

いまさら悔やんでも仕方ないのだろうか。

このころは私への風当たりが厳しく、牧畜の画から少年の日々を回顧して、このような詩を詠んだのです。

遅れる羊を鞭で打つというのは、私の実体験そのままでありましたけれど、やはり『莊子』に遅れる羊が出てきます。自分の生命を養う、養生において大切なのは、遅れる羊を鞭で打つようなことだとあります。人として最もいい状態は、

精神と肉体がともに同じ歩みをしているときで、どちらか遅れる方をちよつと前に進めるようにするのが養生の極意だということです。

横道にそれますが、『莊子』には、このことに続けて、肝心なのは日常生活に気を配ることだと、たとえ話を使って書いています。

どこかの街道で旅人が殺されたという噂を聞いて、旅の仕度をしていた人は、親子兄弟相談し、従者を増やし、警戒怠りなく入念に準備した上で、ようやく出発しました。旅にはそれほどまでに気をつかう人であっても、日々の睡眠、日々の飲食には無頓着であるのはどうしてなのか。自分の生にとっては、一日一日の積み重ねの方がよほど大切なのではないだろうか。

——へーえ、それって、いまでいうところの生活習慣病の戒めってことかな。昔

の中国の知恵ってちょっとおもしろいかも。

でも、どんどん脇道にそれているみたいでなんで気になりますけど。少年のころの話にもどすと、トバー君の家は牛や羊を飼う農家だったの？

㊦ 私の蘇の家はもとは農民でした。昔の中国の民衆はほとんどが農民でしたか

ら、ごく当たり前のことです。宋の国ができたころから、我が先祖は商売に手を出し始めました。糸や布を売り買いする商人になり、ある程度の財産ができると、

まとまった農地を買い、半分が商売、半分が農業ということになりました。それが曾祖父のころです。我が父は若いころは商売人で、商売にかこつけては遠く放浪の旅に出て、何カ月も帰らないことがしばしばでした。私の本性は鹿だと言いましたが、父は単独で大地を自由に駆け巡る狼か虎であったのでしょう。父のそ

の本性を最も多く受け継いだのが姉で、その次が私、弟に至ってはかなり薄くなつたように思います。

父の放浪癖は母と結婚してからもしくはらくは改まらなくて、母は結構心を痛めていました。そんな父の転機になったのが、父の兄が科挙に合格したことでした。兄にできておれにできないはずがないと発奮し、初めて書物を開きました。25歳のときでした。実は我が父も小さいころに寺子屋に入れられたことがあったのですが、勉強を嫌ってほんのわずかな回数しか通わなかったようです。

父は勉強を始めると商売はすっかりやめてしまい、農業も人任せにして、ひたすら学問に打ち込みました。農地からそこそこ食べていけるだけのものが得られるかどうかという暮らして、母は生活を支えるためにこつそり実家に援助を仰いでいたようです。私は寺子屋に通いつつ、牛飼いの仕事を手伝ったりしました。

しかし、本当の農家の子のように農事に通じていたわけではないので、後にちよつと苦労しました。

張先生の寺子屋には3年間通いました。父とは違って、私は子供のころから、筆や硯をいじるのが大好きで、読んだり書いたり、かなり熱中するタイプであつたようです。その一方で、牛や羊を追うようなことも大好きで、次第に勉強に重きを置くようになってからも、時に野山に飛び出さずにはいられない衝動に駆られました。むやみとそこらを走り回り、くたくたになって野原に倒れてみたり、高い場所に駆け上って思いつきり大きな声を出したりしていました。

何度か話に出てきた弟は、1年後れで張先生の寺子屋に入学しました。弟は蘇轍そてつといひます。私は景祐3（一〇三六）年の12月19日の生まれで、弟は宝元2（一

〇三九）年2月20日の生まれでしたから、年齢で3歳、実際の差は2年と少しあ

ったのですが、弟は生まれつき体が大きく、寺子屋に入ってきたときにはすでに私と肩を並べるくらいになっていました。頭脳の方の成長も速く、勉強もすぐに私に追いつきました。それで兄弟当時に科挙に合格ということになったのです。

——賢弟愚兄って言葉があったように思うけど、言っちゃ悪いけど、それに近いってこと。

① まさにその通りです。富弼はそのところをちゃんと見ていたのです。

ただし、野山を駆けることでは弟は兄にまるで適いませんでした。山に入って、私が岩を踏んで溪谷を疾走すると、弟は全くついてくることができなくて、谷の入口で呆然と突っ立って私の帰りを待っているというようなことがよくありまし

た。

張先生の次に私と弟は史清卿先生しせいけいについて、本格的に科挙の受験に向けての勉強をするようになりました。そのころには父も自分の学問観を確立しつつありました。

そのころもまだ山野を駆け巡る私の性癖はなおらず、ある日のこと、弟をほったらかしにして奥へ奥へとずんずん入って行きますと、岩場の上に木を組んで作った小さな庵が見え、そこまで懸命によじ登ると、1人の世捨て人がいて、何やら異様な匂いがたちこめていました。山の奥には、不老長寿の仙薬を作るそのよくな人がいるということは聞いていましたけれど、本物を見たのは初めてで、私は強烈な印象を受けました。野山を駆け巡るのは得意だと私が思っている、その世捨て人はまるで次元が違いました。いま谷の底にいたかと思うと、次の瞬間

には遙かに高い崖の上に立っているというような具合で、私は常人とは違うその人に強い憧れを抱きました。我が姉を連れて行ったのは、その世捨て人の庵だったのです。

——へーえ。これで前の話とつながるんだ。

㊦ そのような世捨て人に憧れる一方で、それとはまったく正反対と言っていい憧れがありました。それが4人のスーパーヒーローです。

張先生に入門してまだ間もないころでした。ある日のこと、先生は生徒に課題を与えますと、ご自身は何やら紙を取り出して熱心に読み始めました。先生が夢中になっているの見て、私はそっと席を立ち、先生の後ろにまわってこっそりの

ぞき込みました。先生はまるで気付きませんでした。いたずらに心が生じ、私は腕を組んでもつたいぶった顔を作り、先生と同じように眉を動かし、首を上下に振って読むそぶりをしました。ほかの生徒がくすくす笑い出し、先生はやっと気付いて、私の方を見ました。叱られるより先にと、

「それには何が書いてあるのでしょうか？」

先生はきつと読んだばかりのことを早く誰かに伝えたい気分であつたのでしよう、かなり興奮気味の声で、

「これは石介せきかいというお方の詩です。いまの世で非常に優れる11人の方々についてお詠みになったすばらしい詩です」

「それはどのような方々なのでしょう？」

「君のような小さい子にはまだわかるまい」

先生はしたり顔で目を閉じました。

「その方々がもしも天の上の人たちであるのなら僕にはわからなくても仕方ないと思います。でも、やっぱり同じ地上の人であるのなら、僕にだってわからないはずはないと思います」

そのとき私は思ったままを言っただけでしたが、先生はかなり驚かれ、私をじつとご覧になって、

「なるほど、君の言う通りだ。では、詩を読み上げるから、よく聞いていなさい」
先生は威儀を正して詩を朗唱してくださいました。「わからないはずはない」と言った私でしたけれども、当時の私にはその詩は難しすぎたので、正直にそのように申し上げますと、

「ならば、今日のところは、特に優れた4人の方々のお名前だけでも憶えておき

なさい」

そして先生が挙げて下さったのが韓琦かんき、范仲淹はんちゆうえん、富弼ふひつ、歐陽脩おうようしゆうの4人のスーパーヒーローだったのです。

このころ、都では大きな変化が起こりつつありました。政治を刷新しようとする運動が大いに盛り上がり、その中心にいたのがこの4人の方々でした。この刷新運動について話し出すと長くなるので、強権的で閉鎖的な政治を改めようとしたものだというくらいに留めておきます。張先生の読み上げた詩は刷新運動を大いに称えたものでしたけれど、運動に対する抵抗は頑健なものがあり、スーパーヒーローを含む関係者は軒並み都から追放されるなどして、運動は挫折してしまいます。

刷新運動の方向性は、我が父が学問に打ち込んでたどり着きつつあったところ

とかなり一致していました。私はまだ子供ながらも、いつか4人のスーパーヒーローとともに天下のために働けるようになったらどれほど素晴らしいかと思うようになりました。子供というものは、自分に何ができそうかと考えるよりも、身の程をわきまえずに大きな希望を抱いたりするものなのでしょう。

4人のスーパーヒーローの仲間に入るには、何はともあれ科挙に合格しなければなりません。科挙を受けるとするのがはつきりとした目標となつて、史先生に教わるようになったのです。

いまのことで矛盾するようですが、官僚になつて高い地位に昇りたいとか、それによつて家を豊かにしたいとか、そのような願望は一切ありませんでした。格好つけて言うのではなくて、いわゆる世俗的な欲は私にはほとんど欠落していたようです。

——まあ、そのきつたないスウェットでいつも平気で歩いているのを見れば、そんな感じはするよ。お酒の銘柄とかもまったく気にしないもんな。

㊦ 酒の本質は酔って精神を完全にできればそれでもいいのです。科挙を受けて官僚になるのは国ために民のために働くためで、それに伴う地位や富のような世俗的なことは関心外でした。

世俗的な欲と言えば、年頃になってきますと、結婚という問題が迫ってきました。私にはそんな気はさらさらありませんでした。姉の悲劇の影響もありました。もしも私が誰かと結婚して、その相手が姉のようになってしまったら、とんでもないことです。結婚さえしなければ何も起こりません。そんなことから、父や親

戚の者が結婚について何か言い出しそうな気配を少しでも察知すると、さっと身をくらまして逃げてしまうということを幾度か繰り返したものです。

昔の中国には、家を代々継いで、先祖の祀りを絶やさないのが人間として何よりも大切であるという伝統的な価値観がありました。私は3人兄弟の2番目に生まれたのですが、兄は早くに亡くなり、事実上は私が長男でした。姉の前にも早くに亡くなった2人の姉がいました。

つまり生きている兄弟姉妹の中で一番上となった私は、本当に世捨て人にでもなってしまう限りは、結婚をしないということはありませんでした。それは重々承知していました。しかし、私は現実と向き合うことを避け、野山に逃れてばかりでした。私が消えた後で、たぶん弟がうまく言い繕ってくれていたのだと思います。大きな騒動にはならず、2年ばかりの猶予を得ることができまし

た。しかし、それもいつまでも続けられず、弟にも悪いので、とうとう観念して結婚しました。それが19歳のときでした。

——えっ、逃げ回って、それで19歳？　なんだかんだ言って、とつても早くないですか？　数えの19歳だよ。いまなら高校を出るか出ないかだ。

ⓧ 当時としては少しも早い方ではありませんでした。父も19歳で結婚していました。父が私を結婚させようと早くから動いていたのは、結婚すれば、余計なことにエネルギーを使わずに勉強に集中できるといふ考えからでもありました。簡単に言えば、性欲に駆られておかしな行動をする以前に結婚させておこうというのは、昔では普通のことでした。

——いまだと、就職して、ちゃんと稼げるようになってから結婚ってことだけど、時代によつてずいぶんと考え方が変わるんだね。

① 何につけても私よりも大人である弟は、私の一年後にすんなり結婚しました。そのころはとつくに背丈で遙かに私を追い越し、そのほかあらゆる点で弟の方がしっかりしていました。世捨て人になりたいとかいらぬ願望ともむろん無縁でした。

私が都で受けた科擧の最終的な合格発表は22歳になった年の3月11日でした。それから1カ月もしない4月7日に母が故郷の眉山県で亡くなりました。都から遠く離れた眉山県でありましたけれど、私たちの合格の報せは母の耳に届い

たものと確信しています。

私たちはただちに眉山県に帰って、足掛け3年の喪に服しました。昔むかしの中国では、学問を修めて人の上に立とうとするような者はとりわけ、規定通りに親の喪に服すことが大変重要視されていました。国の重要な地位に就いていても喪の期間は職務から離れるのが普通で、仕事を優先しようものなら、不道德であると批判されました。

喪の期間中は、私と弟は人との交わりを避けてごく静かに暮らしましたが、父は必ずしもその限りではありませんでした。妻の喪に長く服すという習慣はなかったのです。公務にある者は妻が死んでもそのまま仕事を続けました。

父のもとに都から学士院に入るための試験を受けないかという誘いがありました。学士院というのは学識をもって皇帝を補佐する機関で、その一員になると皇

帝との距離が近くなり、国家中枢の地位に就けるといふことがしばしばありました。普通は官僚としての経験を積んだ者が試験を受けて学士院に入りますが、官僚でもなんでもない父が特別に試験を受けられるようにしてくださいという大変にありがたいお誘いでした。父の学識を高く買ってくださいる方々が都に何人もいたのです。ところが父は病気を理由にその試験を辞退してしまいました。実のところは父はびんびんして、そこらを動き回っていましたけど。

——どうして断ったの？ 試験が嫌いだった？ 昔落ちていたから。

㊦ 狼だか虎だかの本性によるのでしょうか。我が学問に対して失礼だというのです。自分の学識を皇帝が必要とするのなら呼び寄せればいいだけで、どうして試

験など受けさせるのかつてことです。

—へーえ、そういうのって格好いいかも。

㊦ 母の喪が明けると、父はすぐに都に出る用意をし、母の一族と絶縁しました。

父は己の実力だけで国家に役立つ仕事をしてみせると大いに意気込んでいました。科挙に合格していた私と弟は、都に出て任官を求めれば叶うことがほぼ約束されてきました。

郭綸の前に立った私には「前途洋々の確実な未来」があつたということがこれでおわかりいただけたかと思えます。

——10万人も受けた試験に6番で合格したんだから、すごいもんだってことがよくわかったよ。

㊦ 未来は前途洋々でも、故郷を離れる私には後ろ髪を強く引かれような思いがありました。世捨て人への憧れです。もしも、都での合格発表の後、そのままぐに任官していたら違っていたのでしょうか、母の喪に服して足掛け3年を郷里でごく静かに過ごしたために、その生活が棄て難くなったのです。官僚になれば、もう二度とこのような日々は持てないかも知れない、本当にそれでいいのだろうかと思ひ悩みました。郭綸からしてみれば、「いい気なもんだ、馬鹿も休み休み言ってくれ」と、そんなところでしよう。

——贅沢な悩みだとは思うけど、いろいろ迷うのって当たり前だよ。一つに決めてまっしぐらっていうような幸せな連中は、なんかうさんくさように、ボクなんかは思ってしまうけど。

㊦ 世捨て人への憧れなどは、結婚し、科挙を受けるという段階を踏む間に、とつくに消し去っておくべきものでした。あくまでも世捨て人になりたいのなら科挙など受けてはいけなかったのです。端的に言ってしまうえば、体制側の中核の人間になろうとしないながら、アウトサイダーに未練を残すという中途半端な態度はとても許せるものではないでしょう。あるいは、「困い込み」を進める側にいながら、ジョン・クレアの詩をしみじみ鑑賞するようなものでしょうか。

——ボクは、ジョン・クレアの詩に打ち込んでいたところに、こんなことをして、この後で社会でまともに生きて行けるようになるのかって、何度も不安になったんだ。ジョン・クレアのように社会から隔絶したところでなければ、ボクは生きられない人間なのかも知れないって、とつても怖かった。それって、ジョン・クレアに対して失礼で、結局、ジョン・クレアがわかっていなかったってことなんでしょうと思うよ。社会でまともに生きなければと、かなり無理して就活を頑張ったんだけど、結局、内定がゼロで、その後、しばらく引きこもりみたいなことになっちゃんだ。ボクのちっぽけな悩みと、トーパー君の迷いとは、きっと全然違うよね。トーパー君にボクみたいな弱さがあるとは思えないもの。

①

私こそは弱い人間です。文弱と言いましたように、私は詩を詠む人間です。

詩を詠むような人間はきつと心に弱さがあるのでしよう。

当時、官僚になるような人は誰もが詩を作りました。科挙の試験のために詩賦を作る練習を何年も積み、社交上、詩の贈答が盛んに行われ、詩を作るという行為はごく日常的なものでした。しかし、必要上詩を作るのと、内側からの衝動によつて詩を詠まずにはいられないのではまるで違うのではないでしようか。

——ボクは自分では詩を書いたりしないけど、詩を詠まずにはいられないという心持ちはなんとなくわかる気がする。ジョン・クレアの詩に、

わたしは野原で偶然に詩を見つけ、

それらをただ書きとめた。

というのがあったけど、これって、詩を詠まずにはいられなくてことを表現したもののなんだろうと思うんだ。

㊦ この店で蛤を焼いて、口に放り込んで、たまにジャリツとして、あわてて砂を吐き出すということがありますよね。昔は、食べ物を口に入れて、異な感触、異な味がして、虫がまじっていることに気づくのはそう珍しくはありませんでした。虫は誰もがただちに吐き出します。私にとって詩を作るのはそれと同じようなことです。

心の生じたものをただちに言葉にして吐き出さずにはいられないのです。虫だ

って我慢して飲み込んでしまえば消化されます。心に生じたものをそのままにしておけばやはり消えてしまいます。虫を吐き出せばその正体は何であったか見とれるように、吐き出した言葉を見ることで心の内に生じたものの正体を知ることができます。心の内の正体を知るのはいいことなのでしょう。知らずいれば悩むこともなくてすむのかも知れません。

郭綸の話聞いて私たち兄弟は詩を作りました。弟は郭綸の話をお忠実になぞる生真面目な詩で、私は次の華々しい活躍に喝采を送りたいと詠みました。お気楽な夢想です。「愚にもつかない人間」の常として、郭綸との間にあった溝に無自覚であった私にはこのような詩しか詠めなかつたのです。

この郭綸の詩から始まって、旅の間に、父と私と弟は折に触れて数々の詩を作りました。それらを整理して父子3人による詩集を編み、『南行集』なんこうしゅうという題を付け

て、都に着いてから、私たちに好意を寄せてくださる方々に進呈しました。旅は眉山県から始まって、長江ちやうこうの源流の一つである岷江びんこうを南に下ったので「南行」と題したのです。私たち父子3人は一緒に詩を詠み合うのはさして珍しいとは感じていませんでしたが、『南行集』のような詩集は過去にほとんど例のないもので、私たちにとってもこれ1回限りのことでした。

旅に出てからの私は、都の着くまでの間に気持ちの整理が進み、世捨て人への憧れは自ずと消えて、官僚になる心構えが整うことを期待していました。旅の間にいろいろな人と出会い、そのたびに、その人の人生に自分を重ねて考えるような思考が働き、それを詩に詠みました。これからそれらの詩を聞いていただいで、果たして私が旅の間に変化したのかどうか、判定していただきたいと思えます。

——ボクが判定するの？ トーバー君のことを知ってるわけじゃないのに。

① 郭綸に出合ったのは嘉樹かじゆという小さな町で、眉山県から約120里で嘉州かというそのあたりでは大きな町に着きました。ちなみに距離を表わす単位の「里」は中国と日本ではかなり違っています。昔の中国の1里は600メートル足らずです。

嘉州で岷江は二つの川を合わせて水量がぐっと豊かになって、向きをやや東に転じました。その流れに乗ったときの詩。

朝、にぎやかな太鼓に送られて船は嘉州を発った。

折よく西風に送られ、帆柱の先の旗が軽やかにはためいた。

故郷はすでに遠く、

気持ちは船に先んじて遙か前へと飛んで行こうとする。

ともに下ってきた岷江の水はもはやそれとは見分けにくく、

新たに加わった水は清らかである。

川の勢いのままに、

高さ三百六十尺の石仏の足元を瞬く間に通過したかと思うと、

今度は川幅が広がって悠然と平地を行くかのようになった。

ある禅僧と、

小さな町の釣魚台ちようぎょだいで会おうと約束しているのに、

船の歩みはちっとも速くならない。

とうとう川面からは夕靄が湧き立つところになっても、

まだまだ先は遠い。

水のほとりにずっと立ち尽して、

僧はいまも待っていてくれるのだろうか。

——流れが速くなったり遅くなったりしたんだね。いまなら、メールからLIN Eで、あと1里だからもうちよつと待っててねとか送れるけど、そういうのがないのかえって情感を深めていいのかもな。

㊦ 嘉州から約150里で犍けんい為という町に着き、ここには王おうせいゆ齊愈の書楼があります。妻についてはいずれお話する機会があるでしょう。

王斉愈の家はもともとはかなり裕福で、父祖の代からの蔵書家として知られていました。川を望む高台に朱塗りの立派な楼閣を建て、多数の書物を所有していました。昔は、書物は高価で貴重なものでした。我が父は書物を買集める財力がなく、書物を筆写するためによくその書楼に滞在させていただきました。

その後、王の家の豊かさには陰りが生じ、このときの旅で書楼を訪ねますと、王斉愈は遠く北西の地に出ていて、弟の王斉芳^{おうせいほう}と王斉雄^{おうせいゆう}が留守番をしていました。

木々が谷を埋めるその先に、

高くそびえる楼観がある。

昔から知られる書庫で、

今も万卷の書物が塵の内にある。

書楼へと上ると、

山の風に乗って窓辺に鳥が飛びかい、

水のせせらぎにまじって猿の声がした。

私たちは尋ねた。

「書楼のご主人はいまどちらでしょうか」

「ここしばらく遠くの地で辛苦に耐えています。

ときには、頭に甲を載せて敵陣に突っ込み、

首を斬り合うようなことも覚悟しなければならぬようです。

読書三昧の暮らしはもうできなくなってしまうました」

「書物を友としていた者でも、

戦陣に臨んだ例はたくさんあります。

諸葛孔明がまさにそうだったではありませんか」

そのように私は言ったものの、

閑雅と思えたこのあたりの風景が、

まるで違ったものに見え、

この世界に生きる悲しみを覚えた。

書物に囲まれた暮らしを王斉愈がこよなく愛していたのを知る私たちは、何やらはばかれる雰囲気を察知して、詳しいことは聞きませんでした。おそらくは、国境を守る軍のもとに物資を運ぶ仕事をお上から請け負ったらしく思えました。

国家が必要とする物資の調達や輸送は、民間の力を活用した方が効率的であるとして、多くの仕事が民間に任せられていました。請け負った者は成功すれば大

きな利が得られ、官民癒着のもとともなりましたが、うまくいかなかった場合は、請け負った者の自己責任で、国家からの保障はありませんでした。国境の軍隊にまで物を運ぶのは、いつ敵に襲われるかわからないリスクの高い仕事でした。兄の身を案じる弟たちを慰めようと、この詩で諸葛孔明を持ち出しました。諸葛孔明はご存知でしょうか？

——三国志の有名人だったことくらいはゲームで知っているけど。天才的な軍師だったんだよね。風を自在に操ったりもしたとか。

㊦ 諸葛孔明は時代が下るにつれて神格化されて、実像からかなり離れたイメージが膨らまされましたが、三国志の時代の蜀の国を建てた最大の功労者であった

ことは間違いありません。我々蜀の人間が最も尊敬するのは諸葛孔明でありました。

王兄弟とは、それから20年余り後に、私が罪人として流された黄州で再会することになります。王兄弟は書楼を手放して、犍為から遙かに長江を下ったところでわびしい暮らしをしていたのです。

——ふーん、人生はいろいろあるってことか。

㊦ 犍為から160里で戎州じゅうです。「戎」という漢字は、日本語では「えびす」と読むように、未開の異民族を意味します。「未開」という言い方がそもそもおかしいのですが、昔の中国にはいわゆる中華思想というものがあって、中国の外側

には劣った者たちがいると見なしていました。四方の異民族を総称して四夷し いとい、方角によつて東夷とう い、北狄ほくてき、西戎せいじゆう、南蛮なんばんと呼んだりもしました。四夷を蔑視する中華思想は根深いものがあり、私も偏見から免れていたわけではありません。戎州という地名がここにあったのは、このあたりから南がずっと少数民族の居住区となっていたからです。船が下る川をはさむ左右は山また山で、山の数があまりに多いので、船頭たちはひとくくりに「夷中いちちゆうの乱山」と呼んでいました。

山々にはさまれた谷の底のここは天から遠く離れ、

空が晴れているのかどうかもわからない。

明け方はことのほか寒く、

立ち昇る霧によつて高い峰はすっかり包み込まれてしまっていた。

やがて湧き出るようにして岩の壁に光が射してくると、雲の動きとともに、

崖の木々の一本一本がまざまざと見えてくるようになった。

ついに谷の底にまで日の光が落ちてきたので、

私はそれを手ですくい取ろうとした。

そのとき谷の底からは鳥が飛び上がり、

深い青空の中へと吸い込まれて行った。

蛮夷の地であるここの風光を愛する者はいない。

心に適うものなどどこにもない。

だから、世を避ける人であるのなら、

心の鍛錬をするのにここをよしとしないとも限らない。

そのような人を尋ねてみたいと思っても、

山中の道には狼や虎の足跡ばかりがあって行くことができない。

——夜明けの山の姿が時間とともに変化するありさまを詠んだ詩なんだろうけど、ちつとばかり厳しい感想を言うと、狼や虎の足跡を持ち出すのはなんとなく言い訳じみて聞こえたんだけど。トバー君のお父さんの本性は狼か虎かも知れないと言つてたよね。本気で世捨て人になる気があるのなら、狼や虎を友とするってことじゃないのかなあ。

㊦ おっしゃる通りです。世捨て人は非現実への空想的な憧れでしかなかったのでしょうか。だから旅の間に消え去ってしかるべきであったのですが、そうはなら

なかつたようです。

船は日がな一日石の壁ではさまれた谷の底を下り続け、夕方になって、牛口とぎゆうこういうところにまできて左右がわずかに開け、岸边に船を繋ぐことができました。

川から上り立つ薄い霧が、

落ち行く夕日によってほんのり赤く染められるようになったところに、
ようやく船を岸边に繋いだ。

古びた柳の下にたむろしていた三、四人が立ちあがり、

そろりそりところらに寄って来て、

薪はいらんかと売り始めた。

あたりには茅葺の小屋がばらばらと建っていた。

船から上がって、その小屋を見に行くと、

壁の間から星がのぞくような粗末な作りで、

夕食に煮ているものはといえば、

せいぜい野菜があるだけだった。

肉らしいものなどはなく、むろん酒もない。

それでも、子供たちの声は楽しげで、

わびしさを感じさせるものは一切なかった。

もしかしたら、

人生とは本来このようなものなのではあるまいか。

何か事があるわけでもないのに、

世の中のあるれやこれやに誘われて、

苦しみが生じてしまうのだろう。

富貴の輝きが目の前にちらつけば、

貧賤を守り通そうとするのは難しい。

ここに生きる子供らは自然の友であろうとしている。

深い山の中の、いわゆる夷えいしの地に身を置きながらも、

その姿にみにくさを感じさせるものは何もない。

あくせく世間を走り回るこの私は、

いったい何をしようとする者なのだろうか。

——えーと、人生って何だろうなっていうと、たぶん99・999パーセントの人は、きっと何か事があるわけではないんだらうね。ボクにはボクなりにいろいろ

ろあつたとは思うけど、でもそれって特に何か事があつたっていうのではなくて、誰にでもある取るに足りないことなんだろうと思うんだ。

㊦ その取るに足りないことが何より大切なのだと思います。私は、ここで「人生は本より事はなし」と詠みましたが、その意味が本当のところはわかっていませんでした。言葉だけが上滑りして、「いったい何をしようとする者なのだろうか」と問いかけはしても、実のところは都へと向かう思いを強引に整理しようとしていたのです。

——このときトバー君は25、6歳だったんだよね。いまのボクの方が年上ってことになるんだよね。そりゃあね、トバー君とボクとでは比べものになら

ないっていうのはわかっているんだけど、なんか考えが深いって気がするなあ。

㊦ その夜、なかなか寝付かれなくて、私はいつしか船から出て、月の光のもとを歩いていました。

人々が静かな眠りにつくと、

閉じられた船の窓の細いすき間から、

ひそやかに月の光が忍び込んできた。

私はそっと衣をまどって外に歩み出た。

すぐに夜露が降りてきて裾をぬらした。

山と川がひとつの色に染まっていた。

大空をひろびろと渡って行くような気分になって、

あたりをあてもなくさまよった。

いつしか私は都にきていて、

「川が切れたぞ」

という叫び声に驚かされた。

見ると、すでに都の半分はすっかり水びたしで、

さっきまで馬や車が行き来していた道を、

いかだでなければ渡れないありさまになっていた。

一度水の出た町がぎらぎら輝く真夏の太陽に照らされると、

むっとする臭気でいっぱいになった。

今度はどこからともなくさわやかな秋の風が吹いてきて、

竜津橋のあたりで夜市が開かれるという声があった。
りゅうしん

ふらふらとそちらに行ってみると、

無数の燈火が真昼のように煌々と輝いて、
こころこころ

ものすごい人の多さだった。

あまりの喧騒に、逃げるようにして光の輪の外に出ると、

私は再びもとの川べりに立っていた。

月の光に乗じて、

三年前の都に帰っていたのだろうか。

これからはるばる旅路を重ねて、

世間の塵を浴びるためにわざわざ都に行こうとしているのは、

いったいどうしてなのだろうか。

——いまのは夢の詩？ 船から出て行っただっていうのも夢だった？ 3年前の都
つていうのは、受験のために行っただけのこと？

㊦ そうです。都に着いて受験の準備をしていたところに、都は洪水に襲われ、広
い地域が浸水しました。被災した人の多くは、条件の悪い低地に住む、いわば社
会の底辺の人たちでした。その悲惨さを目の当たりにしたばかりなのに、直後に
開かれた夜市の賑わいに圧倒されました。民衆のパワーにたじろかされたと言
うべきかも知れません。やはり私には山の中の暮らしがふさわしいのではないかと
思ったのです。

——再び都へと向かう旅でそのときのことを思い出したってことなんだろうけど、こんな詩を詠みながら、結局は都に行つてちゃんとした役人になったんだよね。

そこるところが、なんかよくわかんないなあ。さつき、詩を詠む人間だからってことを言つてたけど、だったら、ジョン・クレアのように社会から隔離されるとまではいなくても、役人みたいなものにはなれないっていうのが普通ではないのかなあ。

Ⓣ 果たして私はちゃんとした役人になれたのでしょうか。この先を聞いてあなたに判定していただくよりないと思います。

——やっぱボクが判定？ こんなボクに、無理でしょう。ボクもちゃんとまとも

に生きなくてはと、必死に就活したんだけど、あれって実はまともでなかったのかもっていまでは思ったりもする。さっきの詩にあったわびしい村の子供らの暮らしがまともなら、21世紀のボクらの暮らしなんかはそもそもすべてまともでないってことも知れないんだけど。

㊦ 旅の話の続けましょう。戎州に着きますと、そこはこれまでに通過した町とはいささか異なる雰囲気がありました。少数民族との交易のための市が定期的に開かれ、服装や顔付きの異なる人が多数行き来していました。そして、少数民族の側に何か事があったときにすぐに対応できるよう軍団が配備され、兵士の姿が非常に目立ちました。

古くからのこの町は無数の山に囲まれている。

山は痩せて耕す土地はわずかしかない。

それでもここに町があるのは、諸民族との境目であるからだ。

かつては異変の報せに、

軍馬があわただしく出て行って、

そのまま帰らぬこともあったと聞く。

いまは夜ものどかに時の鐘が響きわたるだけだ。

我が宋の文化が広く浸透したのだろう、

あちこちから人々が宋の物品を求めてさかんにやってくる。

ただし金の耳飾りのようなものには関心がなくて、

それぞれの民族特有の装飾品で満足しているようだ。

諸民族が互いに強弱を争って何の意味があるうか。

いまやすべては等しく宋の民であって、

見れば皆がそれぞれにいい表情をしているではないか。

戎州の町で、独特の衣服や装飾品を身に付けて歩く人々を見て、実にいきいき
としていると私は感じました。それで、私のような蜀人であれ、少数民族であれ、

「吾が民はぎょくかん尽く玉顔」と、この詩では表現したのです。

——トバー君って、心が広がったんだね。

① そうだとは言いにくいです。少数民族は劣った民であるという偏見に私も捕

らわれていて、いま私の詩を日本語に直すに当たって、「我が宋の文化が浸透したのだろう」と、やんわりとした表現にしましたけれど、原文は「化に従う」です。劣つたものがより高いものによつてそちらに近づけられるというのが「化に従う」の意味です。教化の「化」^かです。少数民族が宋の文化で教化され、順化したことで、平和

に交易が行われるようになり、宋の民としての顔にもなったという捉え方をしていたのです。

「異変の報せ」ということでは、この少し前にちよつとした事件があつて、それが私たち父子の運命に、「風が吹けば桶屋が儲かる」みたいなまわりまわつての影響がありました。

少数民族にとつては英雄、我が宋からしたら「反逆者」ということになる農智高^{のうちこう}と

いう暴れん坊がいました。中国の南からベトナムの北部あたりに居住するチワン族を率いて民族の自立を目指して宋軍と戦い、最終的には宋が大兵力を投入して儂智高が敗れたのですが、その過程で、儂智高が山道をぐるつとまわって蜀に攻め入ってくるという噂が流れました。まともな地理の知識があれば、遙かに離れたところからくるはずがないとわかるのですけれど、夷狄の住む未開の地のどことも知れないところから突如として敵が飛び出てこないとも限らないと、噂にあおられて蜀では大騒ぎになりました。皇帝は朝廷の重鎮を蜀に派遣して、動揺する人心を静めようとなりました。選ばれたのが張方平ちやうほうへいでした。

張方平は当時名高い大官で、赴任して2カ月ほどで騒ぎはぴたりとおさまりました。そして、地方に埋もれている才能がないかと熱心に探し求め、ある人が我が父のことを告げ、一度会いたいとの誘いが眉山県にきました。父はそれまでに

書き溜めていたものを携えて張方平に会いに行きました。ちょうどそのころまでに父は歴史から学ぶ自分の学問スタイルを確立していました。張方平は父の文章を読んで驚き、その才能を国のために役立てるべきだと都に出るよう強く勧め、都の人々に向けて父のことを知らせるたくさんの手紙を書いてくださいました。折から私たち息子が科挙に受験する機も熟してきていたということもありましたので、父は息子を連れて上京することを決断したのでした。

——ということは、根拠のない噂が広まらなかつたら、トーパー君は都に行つて受験はしなかつたってこと？ おもしろいねえ。

Ⓣ

たぶん科挙の一次試験は都ではなくて地方で受けることになったでしょう。

それによって合否の結果が異なったかも知れません。

ついながら、皇帝に戦争をしないよう代筆したのは、この張方平の依頼でありました。父子二代にわたって張方平とは長く深くお付き合いさせていただいたのです。

父は張方平によって発掘されたという話なのですが、父は眉山県の田舎に人知れず埋もれていたわけではなくて、若いころの放浪の旅から始まって、科擧の受験に失敗した後の失意の長旅など、とにかくたくさんの旅をしてきたために、あちこちに大勢の知り合いがいました。

戎州を後にすると、南井口なんせいこうというところで、父は任孜にんしという人と会う約束をし

ていました。任孜は同じ眉山県の出身で、弟の任俛にんきゆうとともに官僚になっていました。父は南井口で落ち合うべき日付けを任孜に知らせていたのですが、船足が父

の目算よりも遅れ、その日のぎりぎり夕刻になってやっとたどり着きました。任孜は朝のうちには南井口にきていて、岸辺に立つてずっと待っていました。思い出してください。この旅は旧暦の十月に始まりました。冬です。折り悪しく、その日は冷たい雨がずっと降り続いていました。

岸に着くやいなや、父は船から飛び出し、遅れたことを詫びました。任孜は寒さのためにすっかりこわばってしまった顔をかして笑みをつくり、

「幸いにもこうしてお会いできました。すでに十分に満足です」

二言二言かわすと、すぐに任孜は馬にまたがり、行ってしまおうとしました。

日が暮れる前に町に帰り着こうというのです。父は引きとめようとはしませんでしたけれど、容赦なく夕闇がそこにまで迫ってきていましたので、仕方なく去り行く姿を見送ったのです。

川のほとりに始まる一本の細い道。

あなたは別れを告げると、

深く草が茂ったその道を、

馬の足取りも頼りなげに歩んで行った。

煙る雨にあなたの姿は融け込み、

私たちは尽くすことができずに残った思いを抱いて船へと戻った。

しばらくすると、

ぽくりぽくりと蹄の音が聞こえた。

船から雨の中へとまた飛び出ると、

あなたがひらりと馬から降りた。

顔を見合わせ、誰もがまだ口をきかないうちに、

残されていた思いは慰められた。

あなたはほほえみ、

「町に帰るにはもう遅すぎました。

どこまでも長い川、

どこまでも広い大地、

そのどこでも、

いついかなるときであっても、

あなた方とお会いできるというわけではないのですから」

——これって、あれだよ。よくいう「二期一会」ってこと。無限に広い大地の

たった1点のように、どのような出会いも1回限りだっていうことだよな。

それで思い出したんだけど、ボクのおじさんが、『いつもおんなじ繰り返しのように感じられることでも、それぞれは実は1回限りしかないんだ』ってよく言うんだ。それはそうなんだろうなああって、わかるんだけど、夜勤のときなんかには、延々とおむつ交換をしていると、いつもこの繰り返ししかって、正直、うんざりしてしまうんだよなあ。どこかしら不調があるから施設を利用しているお年寄りなんだから、いつ何があるかわからなくて、「1回限り」っていうのは、真実その通りには違いないんだけどさ。まだあと何人残っているって勘定すると、もううんざりだって、ホント思ってしまうんだ。そういう自分がいやだなあって、思ったりもするんだ。

㊦ 私も官僚となって、膨大な文書の処理に追われる毎日となって、何度うんざりしたかわかりません。どの文書も関わりのある人にとっては非常に大切なもので、「1回限り」のものであるのでしょう。一つ一つ誠心誠意対応するのが官僚としての役目であるとわかっていても、来る日も来る日もとなると、どうしたってうんざりします。特に、私個人としては承知しがたい内容であっても、役目として裁可しなければならぬようなことが続くと、放棄したくもなかったこともしばしばでした。私は行政官としてはたぶん不向きであったのでしょう。

そういう私が仕官のために都へと向かう旅の話は、前置きが長すぎたせいで、もう夜もかなりふけてきましたので、あと一つだけ詩を聞いていただいで今夜は終わりとしましょうか。

南井口の先のある急流での詩。

船から見る山は、

まるで馬が駆けて行くかのようだ。

前方から山が現れ出ると、

がらがらと馬に変身して、

足音も高らかに私のかたわらに向かって走ってくる。

山は次々に出てきて、

たちまち数百頭の馬群となって私の横を駆け抜ける。

後ろに振り返ると、

馬の群れはひしめき合いながら遠くへと走り去り、

がらがらと山に戻って消える。

いましもまた走り行く馬の背に、

見れば、一人の男がまたがっているではないか。

船の上の私は手を挙げ、

その人に向かって叫んだ。

すると、その声とともに私は飛んで山上に至り、

船はその間にたちまち流れ去って行った。

うねうねと続く崖の小道に私は一人残され、

馬上にいたかの人はというと、

船とともにいずこかに行ってしまった。

——それって、山の上にいる人と、入れ替わってしまったってこと。そういう感

覚つてあるかもね。夜なんか電車に乗っていて、窓の外に大きなマンションとかが見えてきて、明かりのついている窓がぼつぼつあって、あのどこかにボクが住んでいたらとかって思ったりするよ。どつか旅先で、ローカル線に乗っていて、踏み切りにぼつんと立っている人とかがいて、ああ、あの人がボクだったらとかってね。ボクにもぜんぜん違う人生があつたかも知れないって思ったりするんだ。

㊦ あのとときに山の上の人と私が入れ替わっていたならば、私の人生はどのようなことになっていたでしょうか。「人生は本もとより事はなし」です。こうしてあなたと向かい合つて、思い出話を所望されても、とくに話すことは何もないってことであつたかも知れません。

——それはちよつと違うんじゃないのかなあ。「人生は本より事はなし」で、とくに話すようなことがないように思えても、1人1人に大切なストーリーってあるんじゃないのかなあ。誰にでもある取るに足りないことって、さつきボクは言ったけど、それが実は大事なんだよね、きつと。介護施設で働くようになって、1人1人に人生のストーリーがあつたんだなあって感じるようになった。ジョン・クレアは、それこそ取るに足りない、それまで誰も見向きもしなかつたような草とか虫とか鳥の巣とかを詩に詠んでいるんだ。

㊦ まさに取るに足りない私の話が、もううんざりでありましたら、これで終わりとしましょうし、この次にもまた聞いていただける機会があるのでしたら、旅の続きをまたお話しするとしましょう。

録音はここで終わった。前回よりもかなり長かった。

聞き終わって、トバー君なる人物がますますわからなくなった。

亡き姉のようだと言ってみたり、ジョン・クレアを持ち出したりするのは、イノ君に接近する目的のあやしい手段なのかと疑いもしたけれど、ここまで蘇東坡について詳しく語るのを聞くと、手段と目的が遠く乖離していると思わないわけにはいかない。

では、いったい何が目的なのか。

ヒントは、富弼について書いたものが「事実をありのままに記したものであったとは必ずしも言えない」と語ったことにあるかも知れない。トバー君なる人

は「蘇東坡オタク」で、自分が作り上げた蘇東坡のイメージを相手かまわずしゃべりたくて仕方ないということなのだろうか。イノ君が昔の中国に無知であることを幸い、いい気になって蘇東坡本人を演じているのだろうか。

もしかすると、演じているのではなくて、本気で蘇東坡自身であると思いついでしまっているのだろうか。あたかも、騎士物語を読みすぎて自ら遍歴の旅にのぼってしまったドン・キホーテみたいなのなのだろうか。「フーテンのトーバー」と名乗ったのはそのような意味なのだろうか。

だとしたら、目的などというものはそもそも存在しないということなのだろう。